令和2年度・3年度リージョナルシアター事業

Regional Theatre Projects

事業報告書

一般財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities

目次

はじめに…… 3

事業概要…… 4

派遣アーティストプロフィール…… 6

事業の流れ…… 7

各地のワークショップ・トピック…… 8

（令和２年度）

いわき芸術文化交流館アリオス（福島県いわき市）…… 12

アーティストレポート　田上豊…… 17

（令和３年度）

大空町（北海道大空町）…… 20

アーティストレポート　福田修志…… 24

秋田県（秋田県）…… 26

アーティストレポート　田上豊…… 30

大野市（福井県大野市）…… 32

アーティストレポート　多田淳之介…… 37

掛川市二の丸美術館（静岡県掛川市）…… 38

アーティストレポート　有門正太郎…… 43

枚方市総合文化芸術センター（大阪府枚方市）…… 44

アーティストレポート　ごまのはえ…… 47

久留米シティプラザ（福岡県久留米市）…… 48

アーティストレポート　多田淳之介…… 53

荒尾総合文化センター（熊本県荒尾市）…… 54

アーティストレポート　ごまのはえ…… 59

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的な文化・芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業に取り組んでいます。

平成 26 年度からはじまった本事業は、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施する事業です。各参加ホールのプログラムは、地域のニーズに合わせて自由に企画され、学校の授業時間を使って実施するアウトリーチ、幅広い年代の市民が交流するキッカケにするための公募ワークショップ、公立文化施設・自治体職員等が文化事業について考えるワークショップなど、多彩なプログラムとなりました。

令和２年度は、５団体で実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、４団体で中止（うち３団体は令和３年度に延期）となり、令和３年度は、前年度から延期となった３団体を含む７団体で実施しました。

この報告書は、「令和２年度・３年度リージョナルシアター事業」において実施した事業内容をまとめたものです。地域の公立文化施設の職員や地方公共団体の芸術文化担当者が、演劇の手法を活用したワークショップを企画される際や、公共ホールの担当者と地域の表現者の共同作業を行う際の参考としていただければ幸いです。

終わりに、この事業を主体的、積極的に取り組んでいただいた実施団体、事業実施にあたり貴重なアドバイスや各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいたアーティスト、その他多くの関係者の皆さまのご協力により、事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

一般財団法人地域創造

事業概要

1. 趣旨

一般財団法人地域創造は、公共ホールの活性化と創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホール職員等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、演劇の表現者（演出家等）を公共ホールに派遣し演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

2. 対象団体

①地方公共団体

②地方自治法第 244 条の 2 第 3 項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体

③地域における文化・芸術活動の振興に資することを目的として設立された、公益財団法人等（②を除く。）のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これらに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの

3. 事業内容

派遣された演劇の表現者（演出家等、以下派遣アーティスト）と協働して地域や対象団体の課題やヴィジョンを元に事業を企画し、演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

①事業日程

原則として 3 泊 4 日以内を 2 回、または 5 泊 6 日以内を 1 回とします。

なお、事業実施に向けて打合せやアウトリーチ先の下見等を 1 泊 2 日以内で実施します。

②プログラムの実施時間

計 840 分のプログラムを実施します。

【実施時間の考え方】

〈プログラムの実施時間〉

下見を除いた派遣において計 840 分のプログラムを実施することができます。時間の配分は、参加団体と地域創造、アーティストの三者で調整します。規定の時間数や日数を超えるプログラムの場合は、別途謝金や経費が発生し、参加団体の負担となります。

〈学校でのアウトリーチについて〉

学校（小・中・高校等）の授業枠でアウトリーチを実施する場合、1 コマの時間は、小学校では 45 分× 2 時限（90 分）、中学・高校等では 50 分× 2 時限（100 分）を最小限とします。また、1 コマの対象人数は 1 クラス約 30 人を目途にしています。

４. 支援措置

（１）一般財団法人地域創造が負担する経費

①派遣アーティストにかかる経費

派遣アーティストの下見、プログラム実施にかかる派遣経費（謝金、交通費、宿泊費等）及びプログラム実施の際のアシスタント２名分の派遣経費（謝金、交通費、宿泊費等）

（２）実施団体が負担する経費

①研修会参加にかかる経費

ホール担当者の研修会の旅費（交通費、宿泊費等）

②プログラム実施にかかる経費

プログラムを実施する際の経費（会場使用料、機材使用料、現地移動費、消耗品等）

③その他

規定の時間や日数を超えて実施する場合の謝金や旅費等の経費

（３）その他

派遣アーティストの指定はできません。

５. プログラムについて

各地域の課題に取り組むために、演出家が地域で演劇のワークショップを行います。演劇の手法を使った学校でのアウトリーチ、地元の演劇人や学校の先生、行政職員を対象にした研修会、地元の若い演劇人が派遣アーティストのアシスタントとしてワークショップに関わりステップアップを試みる、子どもたちを対象に演劇に触れる時間を持つなど、地域独自の様々なプログラムを自由に企画していただけます。

派遣アーティストプロフィール

派遣アーティストは派遣先の地域でワークショップを行う講師を務める他、実施団体の企画する事業の内容について、実施団体担当者と共に検討を行うコーディネーターの役割も兼ねます。

多田　淳之介（演出家、東京デスロック主宰）

1976 年生まれ。神奈川県・千葉県出身。演出家。東京デスロック主宰。
現代を生きる人々の当事者性をテーマに古典から現代劇、ダンス、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。地域、教育機関での子どもや演劇を専門としない人との創作、ワークショップ、韓国、東南アジアとの海外コラボレーションなど、演劇の協働力を軸にボーダーレスに活動する。2010 年より富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督に公立劇場演劇部門の芸術監督として国内歴代最年少で就任、3 期 9 年間務める。2014 年『가모메 カルメギ』が韓国の第 50 回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。東京芸術祭共同ディレクター／ファームディレクター。青年団演出部。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。おもな演出作品に『再生』『가모메 カルメギ』『ハッピーな日々』『BEAUTIFUL WATER』など。

田上　豊（劇作家・演出家、田上パル主宰）

劇作家／演出家／田上パル主宰。1983 年生まれ熊本県出身。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。専門は現代劇。移りゆく時代の中で揺らぐ人間やその集団を描き出すのを得意とする。劇団外でも公共劇場プロデュース公演やダンスカンパニーとの合作、国際共同事業など様々な活動を展開。近年は全国各地の小学生から高校生までを対象にした作品創作を精力的に行い、地域性を生かした演出法に定評がある。創作型、体験型、育成講座まで幅広くワークショップも行う。2019 年より富士見市民文化会館キラリふじみの芸術監督を 1 期 3 年務める。地域創造派遣アーティスト、劇団青年団演出部。奈良市アートプロジェクト舞台芸術プログラムディレクター。芸術文化観光専門職大学助教。

有門　正太郎（演出家・俳優、有門正太郎プレゼンツ主宰）

1975 年生まれ北九州市出身。倉本聰主宰「富良野塾」、泊篤志代表「飛ぶ劇場」を経て、2005 年「有門正太郎プレゼンツ」を始動。「笑顔になれば何でも出来る」を合い言葉に作、演出も務め全国でワークショップやアウトリーチ活動も行っている。俳優では様々な全国ツアー公演等に参加。高校演劇専科での講師経験を活かし、北九州芸術劇場「日韓合同キャンプ～チャレンジ！えんげき～」の総合演出等も務める。役者として主な出演作品、富良野塾公演『今日、悲別で』『走る』（作・演出：倉本聰）、北九州芸術劇場プロデュース『錦鯉』（作・演出：土田英生）『江戸の青空』（作：千葉雅子、演出：G2）、時空の旅『シラノ・ド・ベルジュラック』（演出：永山智行）など。

福田　修志（劇作家・演出家、F’s Company 代表）

1975 年生まれ、長崎市出身。長崎大学教育学部卒。1997 年に F's Company（フーズ・カンパニー）を旗揚げし、以後、作・演出を務める。現代社会の中に潜む人間の弱さを寓話化して描く作風が特徴。長崎市主催の市民参加型舞台にも深く関わり、九州圏内の学校や地域での演劇ワークショップの講師や外部脚本の執筆、地元 TV やラジオの CM 出演なども行っている。代表作『マチクイの詩』（第 15 回日本劇作家協会新人戯曲賞最終選考作品）、2009 年度～長崎市自主文化事業『演劇による表現力育成事業』の講師、2011 年度文化庁『次代を担う子どもの文化芸術体験事業（派遣事業）』の講師。

ごまのはえ（劇作家・演出家・俳優、ニットキャップシアター代表）

1977 年大阪府生まれ。劇作家、演出家、俳優。佛教大学在学中より演劇をはじめる。1999 年自身が劇団代表となって「ニットキャップシアター」を設立。以来、京都を創作の拠点に日本各都市で公演をおこなっている。作品には民族楽器の演奏や独自の身体表現が使われ、時に「わかりづらい」といわれる時もあるが元気に活動をつづけている。また近年は「古事記」にあるエピソードをもとに物語をつくっている。2004 年『愛のテール』にて OMS 戯曲賞大賞受賞。2005 年『ヒラカタノート』にて OMS 戯曲賞特別賞受賞。2019 年『チェーホフも鳥の名前』が第 64 回岸田國士戯曲賞最終候補に選ばれる。特技はムックリ。一般社団法人毛帽子事務所所属。

＜アドバイザー＞
内藤　裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長）
岩崎　正裕（劇作家・演出家、劇団太陽族代表）

事業の流れ

1　全体研修会

令和２年度リージョナルシアター事業　令和元年 11 月 11 日（月）～ 12 日（火）
令和３年度リージョナルシアター事業　令和２年 11 月 16 日（月）～ 17 日（火）

2　事業内容の調整・下見の調整

派遣先への説明、日程調整

3　下見派遣（原則１泊２日）

派遣アーティストと地域創造担当者が現地を訪問し、打合せと会場下見等を行う。

4　事業内容の再調整・派遣先との調整

5　合意書の締結（三者）

・ワークショップ実施日程、内容決定
・経費負担の取り決め等

6　1回目派遣（原則３泊４日／２回目派遣と合わせて５泊６日も可）

プログラム実施
（派遣アーティスト× 1 名、アシスタント× 2 名、地域創造 1 ～ 2 名）
［1 日目］移動・打ち合わせ、［2 日目］実施 1 日目、［3 日目］実施 2 日目、［4 日目］移動

7　2回目派遣（原則３泊４日）

プログラム実施
（派遣アーティスト× 1 名、アシスタント× 2 名、地域創造 1 ～ 2 名）
［1 日目］移動･打ち合わせ､［2 日目］実施 1 日目､［3 日目］実施 2 日目､［4 日目］フィードバック・移動

8　事業報告書提出（事業終了１ヶ月後）

各地のワークショップ・トピック

リージョナルシアター事業は、実施団体とアーティスト、地域創造の三者が対話をしながら、地域やホールの課題や展望を鑑みてプログラムを作っていきます。令和２年度・３年度の特徴的なプログラムをご紹介します。

演劇ワークショップの手法や効果を共有するプログラム

事業において協力関係を持ちたいと考える団体や事業実施団体の職員等を対象に、演劇の手法によるワークショップの内容や効果を体験できるプログラムを実施しました。教職員、行政職員、事業実施団体職員、地域で活動する表現者等を対象に実施しました。

教職員等に向けたワークショップ（大空町）

地域で活動する表現者に向けたワークショップ（掛川市）

学校の授業時間で行うアウトリーチプログラム

子どもへのアプローチとして、学校の授業時間内で演劇の手法によるワークショップを実施しました。想像力を使うプログラムで、子どもたちも先生も、普段の授業では見られないクラスメイトの新たな一面を垣間見ることができました。いわき市では、山間部の中学校２校での合同アウトリーチを行い、普段顔を合わせない生徒同士の交流も図ることができました。

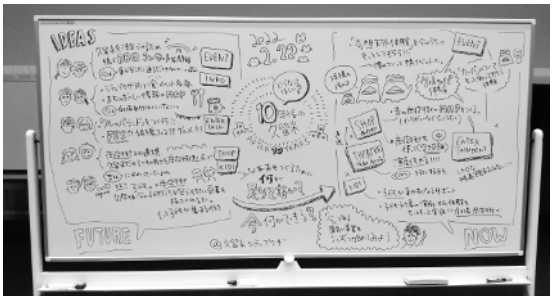
高等学校でのアウトリーチ（大野市）

中学校２校合同のアウトリーチ（いわき市）

地域の文化を考える場づくり

市職員、ホールの職員等が地域の文化について考えるプログラムを実施しました。自分たちのまちの課題や現状を見つめ直し、10 年後のまちの姿等、アイディアを出し合う中で、様々な意見が出て、交流が生まれました。

公民館職員が企画を考えるワークショップ（大野市）



ホール職員が地域の文化を考えるワークショップ（久留米市）

地域の資源を活かし、地域の魅力を再発見するプログラム

普段見ている風景から想像して、見方を変えてみるプログラムや、地域の写真から物語を考えて記憶を掘り起こすプログラムを実施しました。まちの風景や地域の新しい魅力の再発見につながりました。

「掛川不思議発見！マチ歩き」（掛川市）

「荒尾の風景から物語をつくる」～脚本ワークショップ～（荒尾市）

世代間、地域間の交流を図るプログラム

ホールで活動する子ども劇団や公募市民が一緒に作品を創り上げるプログラムや、親子で普段行っていることを交換して演じてみるプログラムで世代間交流を図りました。また、まちの風景を句にして昼ドラ川柳を発表しあうプログラムを実施し、地域間交流を図りました。

「荒尾の風景から物語をつくる」～表現ワークショップ～（荒尾市）

親子で「劇あそび」ワークショップ（大空町）

ホールを交流の場として活用するためのプログラム

ホールを交流拠点として使用してもらうことを目的に、地域で活動する劇団にワークショップを体験してもらうプログラムを実施し、今後の関係づくりにつなげました。また、ホールに多様な世代を呼び込むために、中高生を対象とした演劇ワークショップを実施し、ホールの裏側まで知ってもらう機会としました。

地域でのワークショップの担い手づくり（久留米市）

中高生対象体験ワークショップ（枚方市）

令和2年度リージョナルシアター事業

いわき芸術文化交流館アリオス（福島県いわき市）実施データ

実施団体	いわき市
実施ホール	いわき芸術文化交流館アリオス
担当者	萩原宏紀、谷 健治、早川まこと
実施期間	下 見 派 遣　令和２年６月 15 日（月）～６月 16 日（火） １回目派遣　令和２年９月 22 日（火）～９月 25 日（金） ２回目派遣　令和２年 10 月 26 日（月）～ 10 月 29 日（木）
アーティスト等	アーティスト：田上 豊　　アシスタント：（1 回目・2 回目）田中 美希恵、江花 明里

■下見派遣内容

6 月 15 日（月）会場下見・打合せ（いわき市総合教育センターチャレンジホーム、いわきアリオス小劇場・稽古場）

6 月 16 日（火）地域の視察（桶売地区）、会場下見・打合せ（いわき市立桶売中学校）

■１回目派遣内容

9 月 23 日（水）11：00 ～ 12：00　チャレンジホームワークショップ①

9 月 24 日（木）13：35 ～ 15：25　いわき市立川前中学校・いわき市立桶売中学校 合同ワークショップ①

9 月 25 日（金）10：00 ～ 12：00　チャレンジホームワークショップ②

13：30 ～ 15：20　いわき市立湯本第三中学校ワークショップ①（2 年生対象）

■２回目派遣内容

10 月 26 日（月）14：00 ～ 15：00　チャレンジホームワークショップ③

10 月 27 日（火）11：25 ～ 12：15、13：35 ～ 15：25　いわき市立川前中学校・いわき市立桶売中学校 合同ワークショップ②

10 月 28 日（水）9：25 ～ 11：20　いわき市立湯本第三中学校ワークショップ②（1 年生対象）

13：00 ～ 15：00　チャレンジホームワークショップ④

スケジュール

派遣回	下見派遣		1 回目派遣				2 回目派遣			
月日	6 月 15 日	6 月 16 日	9 月 22 日	9 月 23 日	9 月 24 日	9 月 25 日	10 月 26 日	10 月 27 日	10 月 28 日	10 月 29 日
9：00	移動			打合せ			移動		湯本第三中学校②	
10：00		桶売地区視察				チャレンジホーム②		会場下見		フィードバック
11：00				チャレンジホーム①				川前中学校・樋売中学校②		
12：00										移動
13：00	チャレンジホーム打合せ			打合せ	川前中学校・樋売中学校①	湯本第三中学校①			チャレンジホーム④	
14：00		桶売中学校打合せ					チャレンジホーム③			
15：00	アリオス会場下見・打合せ			チャレンジホームに向けた稽古		振り返り	打合せ	振り返り		
16：00					打合せ					
17：00		移動	移動			打合せ				
18：00					チャレンジホームに向けた稽古	移動				
19：00										
20：00										
21：00										

プログラム詳細

チャレンジホーム 演劇ワークショップ「チャレンジホームアリオス」（1 回目、2 回目）
9 月 23 日（水）11:00 ～ 12:00　参加者：5 名
9 月 25 日（金）10:00 ～ 12:00　参加者：4 名
会場：いわき芸術文化交流館アリオス（小劇場、稽古場 3・4、館内）、いわき市平中央公園

いわき市内の「チャレンジホーム」（適応指導教室）を対象にワークショップを実施しました。この教室はいわきアリオスから歩いてすぐ近くの場所にありますが、通級する小中学生にとって、劇場は必ずしも近い存在ではありません。この企画を通して劇場を知ってもらい、少しでも身近な存在になれればと、教室名をもじった「チャレンジホームアリオス」というタイトルを付け、1 回の派遣につき 2 回ずつ（計 4 回）の時間を一緒に過ごすことで、少しずつコミュニケーションを図っていくことにしました。

1 回目の WS では、いわきアリオスの大ホールや中劇場などを巡る館内ツアーを実施。通常は見ることのできない舞台裏やたたき場なども紹介し、いわきアリオスを知ってもらう第一歩目になったのではないかと思います。

そして 2 回目 WS では、舞台を小劇場に移し、アシスタント 2 名による宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」の朗読劇のデモンストレーションに、照明・音響オペレーター、雪を降らせる舞台スタッフとして参加してもらいました。当館の技術スタッフから操作方法を教わり、きっかけ合わせを経て、いざ迎えた本番では、ミスなくそれぞれの役割を果たしました。1 回目では見られなかった達成感に満ちた表情が印象的でした。

チャレンジホーム 演劇ワークショップ「チャレンジホームアリオス」（3 回目、4 回目）
10 月 26 日（月）14:00 ～ 15:00　参加者：6 名
10 月 28 日（水）13:00 ～ 15:00　参加者：6 名
会場：いわき芸術文化交流館アリオス（館内および周辺）、いわき市平中央公園

2 回目派遣では、引き続き「雨ニモマケズ」を題材にして、映像作品づくりに取り組みました。文章を区切れごとに分け、ひとりひとりに与えられた文章部分の監督として主体的に創作を体験してもらう活動です。あらゆることを自ら決定し、周囲に様々な指示を出して、割り当てられた詩を朗読・収録する、という複雑な作業に挑戦してもらいました。

3 回目の WS では撮影場所を探しに、館内や隣接する公園などでロケハンを行いました。人工的な空間や自然といった様々な場所を見て回り、どこでどう撮影したら良い映像が撮れるか、想像を膨らませてもらいます。また、誰に出演してもらうか、どんな演技をしてもらうか、という点も各自で考えてもらいました。

4 回目の WS にはアシスタント 2 名も参加し、iPad を使用して撮影を行いました。限られた時間でしたが、全員が当日までにしっかりとシーンをイメージしてきた甲斐もあり、撮影は順調に進みました。参加者だけでなく、田上さんや田中さん・江花さん、そして担当スタッフのほぼ全員が監督の指示のもとに何らかの役を演じました。撮影した映像は簡単な編集をし、最後は館内に戻って完成した作品を鑑賞しました。

おでかけアリオス　川前中学校・桶売中学校　合同　演劇ワークショップ（1 回目）
9 月 24 日（水）13:35 ～ 15:25
会場：桶売中学校　音楽室、校内
参加者：7 名（川前中学校 2 名、桶売中学校 5 名）

少子化の進む山間部の中学校２校合同でのワークショップ。一緒に作品を創ることで両校の生徒同士の交流を深めてもらい、また、今まで以上に地域に親しみを感じられる機会になればと、２回の WS を設定しました。

普段は先生や保護者以外の大人と接する機会の少ない生徒の皆さんだと伺っていたため、１回目の WS の出だしは、いす取り鬼ごっこや聖徳太子ゲームでアイスブレイク。先生方も参加して、あっという間に場が温まりました。その後、アシスタント２名を交えて３人１組になり、台本の空白部分を穴うめし、実際にシーンを作成していく演劇づくりを行いました。台本のシチュエーションに合った場所を校舎内から探し出し、色々なアイデアを出しあいながら、短い時間で稽古に励む中学生たち。ベースとなる台本は同じでも、穴うめしたセリフとそれに見合った演出によって、まったく異なる個性の３作品ができあがり、観客の先生方からも大きな拍手が沸きました。

おでかけアリオス　川前中学校・桶売中学校　合同　演劇ワークショップ（2 回目）
10 月 27 日（火）11:25 ～ 12:15、13:35 ～ 15:25
会場：桶売中学校　図書室、熊倉神社（桶売地区）
参加者：7 名（川前中学校 2 名、桶売中学校 5 名）

桶売地区には、地名の由来になったとも言われている、桶ノ臣と瓜姫の悲恋の伝説の言い伝えがあります。

２回目の WS では、この物語をもとに田上さんが書いた台本を使い、生徒たちは２チームに分かれて、穴うめによる台本作成と映像制作を行いました。

前半は図書室でじっくりとセリフを考えていきました。１回目 WS の台本とは違い、今回の台本は空白部分が多く、かつ連続しています。最初のセリフ次第で無限に展開していく会話を作っていくため、初めのうちはみんな悪戦苦闘している様子でしたが、田上さんたちのアドバイスを受けながら、オリジナルの台本が完成しました。また、台本のト書き部分に付ける演出もイメージしてもらいました。

給食を食べてからの後半は、桶売地区にある熊倉神社まで移動し、映像作品づくりに取り組みました。鳥居をくぐり、長い階段を抜けた先に重厚な社を構える神社内には、屋外弓道場や美しい竹林が広がっています。地域ならではの場所を舞台に、２つのまったく異なる「桶売物語」が生まれました。生徒ひとりひとりの熱演に加え、先生方も楽しんでエキストラとして出演し、２つの中学校全体で作品を創りあげました。

WS の最後は学校に戻って、編集した映像作品を全員で鑑賞しました。

おでかけアリオス　演劇ワークショップ
9 月 25 日（金）13:30 ～ 15:20
10 月 28 日（水）9:25 ～ 11:20
会場：湯本第三中学校　体育館
参加者：2 年生 24 名（9 月）／ 1 年生 30 名（10 月）

当館のアウトリーチ事業「おでかけアリオス」として、湯本第三中学校の 1 年生および 2 年生を対象に、学年ごとに日程を分けて同様の内容でワークショップを実施しました。いす取り鬼ごっこや、ゾンビ鬼ごっこ、主体的に参加する演劇の体験を通じて、「伝え合う・助け合う・演じ合う」ことを学びました。

演劇は 3 名のグループワークで、配布された台本を基にシチュエーションやセリフの一部を考え、体育館内のどこを舞台に、どのような演出で演じるかを話し合い、最後にクラスメイトの前で発表しました。講師からアドバイスを得ながら、グループでアイデアを出し合ってイメージを膨らませ、仲間たちと協力してひとつの作品づくりに取り組む姿や、生き生きとした表情は印象的でした。

生徒からは、「演劇の楽しさや難しさを知れた」、「演劇に興味を持った」、「このような機会があればまた参加したい」等の感想がありました。初めて参加した演劇 WS は、生徒たちにとって有意義な時間となったようでした。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

いわき芸術文化交流館アリオスでは、広大な市域を誇るいわき市の隅々にまで文化芸術を届けるべく、開館前の2007年から「おでかけアリオス」の名称で、地域コミュニティや学校を対象にアウトリーチ事業を実施しています。しかし、音楽とダンスのアウトリーチがメインで、演劇はここ10年ほど実施できていませんでした。今後、「おでかけアリオス」にて演劇のアウトリーチも実施していきたいと考え、地域創造が長年蓄積してきたノウハウを吸収したく、リージョナルシアター事業への参加を決めました。また、これまでの「おでかけアリオス」では実施できていなかった、適応指導教室に通う児童・生徒へのアプローチなど、新しい取り組みにも挑戦するため、アウトリーチ経験が豊富なアーティストとの出会いにも期待していました。

●企画・実施において苦労した点

・2019年11月の全体研修会の時点ではまったく想定していなかった、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、事業を実施するかどうかの判断は非常に難しかったです。また、どのような対策のもとに実施するか、誰も経験のない事態でしたので、時間をかけて各学校と調整しました。
・適応指導教室に通う児童・生徒へのアプローチとして、当館の小劇場を使用した舞台技術講座の要素も含むワークショップを開催しましたが、劇場機構を使用するため、技術スタッフも含めて関わるスタッフが多くなりました。そのため、事前にWSの内容を詰めて、関係各所に相談する必要があったのですが、参加者の人数が確定するのも実施間際だったため、内容を詰めることや説明することに苦労しました。
・川前中学校と桶売中学校の合同WSは、当初、地区内の小・中学校併せて6校での合同を想定して学校に相談しましたが、演劇WSのイメージをうまく伝えられなかったこともあり、最終的に中学校2校の合同となりました。そのため、今回の活動を撮影・編集した映像資料を作成し、今後も活用することにしましたが、映像編集に非常に時間がかかることになりました。
・初めての取り組みが多かったため、なかなか時間が読めず、最終的な時間設定を決めるのに時間がかかり、具体的な内容の決定も実施間際になってしまいました。その結果、約200分の持ち時間が余ることとなり、急遽1校（湯本第三中学校）のアウトリーチを追加することにしました。

●プログラムを実施した成果

・学校や劇場の外でも活動を行いましたが、地域に親しみ、屋外特有の開放感を楽しむ新鮮な体験を提供できたと感じています。また、新型コロナウイルス感染症の感染対策として、密を避けることにもつながりました。空間や環境に合わせた表現が可能な演劇だからこその成果だと思います。
・コロナ禍での密を避けた作品づくりとして、田上さんから映像の使用をご提案いただきましたが、映像作品として形に残すことで、全員で鑑賞して楽しさを共有し、活動の充実感を得ることにつながったのは大きな成果でした。家族やご近所の方にも見せたいと、先生方にも喜んでいただけました。
・時間をかけることによって、劇場で実施する公募WSに近い形での丁寧な作品づくりを、学校アウトリーチでも行えたことが、今回の一連のWSでの一番大きな成果でした。参加した児童・生徒や先生方から非常に高い評価と感謝をいただきました。

●今後の展望

当館で実施しているアウトリーチ事業（おでかけアリオス）に演劇のワークショップを取り入れたいという思いはありましたが、これまで実現に至ることができませんでした。そのため、今回のリージョナルシアター事業には大きな期待をしていましたが、実施後には、想像していた以上の成果と充実感を、参加してくださった皆さんに提供することができたと感じています。今後もこのような質の高い体験機会を学校や地域に届けていけるよう、演劇的手法によるアウトリーチを継続的にアウトリーチのプログラムに取り入れていきたいと考えています。また、地域の特色を生かした屋外での活動や、少人数の参加者とたくさんの時間を一緒に過ごす活動を、今後も様々なジャンルのアウトリーチで活用していきたいと考えています。

人の想像力と智慧を生かして

田上　豊

コロナの影響により、各地でリージョナルシアター事業の中止が相次いだ今年度。その中でも唯一実施されたのが、いわき芸術文化交流館アリオスでした。いわき市は、東北地方で２番目に人口（33 万人）の多い都市で、福島県内で最大の面積を持っています。また、いわき湯本温泉や、スパリゾートハワイアンズなどの観光資源を持ち、海産物の大変美味しい地域としても有名です。アリオスは、そのいわき市の中でも文化芸術の中核を担う劇場として 2009 年に開館し、現在でもその存在感を十二分に発揮しています。

●全体プログラムについて

アリオス・リージョナルで企画されたプログラムは、未成年へ向けたアウトリーチがメインとなりました。一つは、中学生を対象にしたもので、山間部と都市部の二校。もう一つは、適応指導教室の小・中学生へ向けたもので、こちらはアリオス館内で開催し、対象者と劇場の出会いの場としても活用されました。これらの全てが創作プログラムであり、多種多様な 10 代の方々へ演劇を届ける作業は、コロナ禍ということもあり、独特の緊張感の中で慎重に進められました。

●地域との連携

アリオスからの強い要望の一つが、山間部の中学校アウトリーチでした。実際に出向いてみると、生徒の参加者は二校合わせて７名。過疎によって少子高齢化が著しく進んでいる地域でしたが、校長先生を筆頭に、教員の皆さんの多大なるご協力があり、最終的には近所の神社に出張して壮大な地域ぐるみのプログラム展開となりました。短い滞在でここまでのことになるのは、なかなかありません。アーティストと地域（学校）のマッチングを重要視し、粘り強くコーディネートに当たってくれたチームアリオスの下準備が功を奏し、まさにアーティスト冥利につきるような時間でした。

●適応指導教室の児童へのアプローチ

次に「適応指導教室の児童」に対するワークショップ。こちらは、劇場の目と鼻の先にある総合教育センター内の「適応児童教室・チャレンジホーム」に通う生徒さんたちへ向けて実施することになりました。アリオスとしては、この組織とタッグを組むのも、「適応指導教室の児童」を演劇アウトリーチに招くのも初の試み。そこでチームアリオスは、この対象者に対し、自分たちの顔を覚えてもらおうと何度も教室に足を運んだそうです。ご近所という地の利もありますが、こういった足を使う精神を持ち得ていることこそが最も大切であり、説得力のある社会包摂の態度だと感じます。劇場に人を呼び込むために積極的に「外」に出て行く。そうして、劇場までの道を作ろうと地道な努力を重ねる。その尽力が実を結び、適応指導教室への来館に繋がったといっても過言ではありません。

●コロナ禍でのワークショップ

コロナ禍により、演劇ワークショップも新しい可能性を探らなければならなくなりました。マスク着用で密を避ける、接触を避ける、人数を減らす。様々な対応の中で実現可能なもの一つずつ行っていくしかありませんが、アーティストの苦悩とは裏腹に、実施をすれば、これまでにないくらい喜ばれたりもします。コロナ疲れの中で鬱屈していくものに対し、表現のワークショップの持つ癒しや発散、楽しさが、力を発揮しているのだと思います。また、コロナを機にオンラインでのワークショッププログラムが数多く台頭してきたことも、業界全体にとっては良い動きだと感じています。

●まとめ

アリオス・リージョナルの特筆すべき点は、同じ中学生、適応指導教室の児童に対し、時期を分けて複数回実施をしたことです。継続プログラムは、参加者の理解や体験自体に深みを出すことができ、実施側も踏み込んだ内容のもの（発展系）を展開できる利点があります。シンプルに「再会」が担保されているのはとても嬉しいことです。さらに継続性に関して言えば、アリオスは、今回の取り組みを一過性のものにせず、次年度も見据えているとのこと。もはや、さすがとしか言いようがありません。褒めてばかりいてもいけませんが、明確な目的意識と、足を使う精神と、継続的な視野を持って取り組んでくれたアリオスの皆さんとのひと時は、大変有意義なものでした。山道での立ち往生事件や、劇場の入り時間巻き巻き事件も含めて（笑）。さらなる土産話を作るためにも、また行きたい！アリオス！

令和3年度リージョナルシアター事業

北海道大空町　実施データ

実施団体	大空町
実施ホール	大空町教育文化会館ほか
担当者	教育委員会　生涯学習課社会教育グループ　歌丸庸介
実施期間	下 見 派 遣　令和３年４月 21 日（水）～４月 22 日（木） １回目派遣　令和３年６月 24 日（木）～６月 27 日（日） ２回目派遣　令和３年７月 14 日（水）～７月 17 日（土）
アーティスト等	アーティスト：福田修志　　アシスタント：（1 回目）田中俊亮、松本恵　（2 回目）有門正太郎、松本恵

■下見内容

4 月 22 日（木）学校訪問（女中・東小）※受入学年担任及び教頭との打ち合わせ、地元女性部と協議、地元劇団（そら）との交流

4 月 22 日（木）会場下見（東藻琴農村環境改善センター・大空町教育文化会館・女満別研修会館）、企画打ち合わせ（役場総務課・放課後子ども教室）、地域資源（町内）の視察

■１回目内容

6 月 25 日（金）15：00 ～ 17：00　教職員対象ワークショップ

6 月 26 日（土）　9：00 ～ 11：00　親子公募ワークショップ（劇あそび「こどものためのハローワーク」）

13：00 ～ 15：30　自治会女性部会ワークショップ（大人だって楽しみたい「大空町昼ドラ川柳のススメ」）

■２回目内容

7 月 15 日（木）9：40 ～ 11：30　女満別中学校アウトリーチ①（3 年 A 組）

13：20 ～ 15：10　女満別中学校アウトリーチ②（3 年 B 組）

7 月 16 日（金）※都合により中止（東藻琴小学校アウトリーチ（6 年生）、町民劇団 WS）

スケジュール

派遣回	下見派遣		1 回目派遣				2 回目派遣			
月日	4 月 21 日	4 月 22 日	6 月 24 日	6 月 25 日	6 月 26 日	6 月 27 日	7 月 14 日	7 月 15 日	7 月 16 日	7 月 17 日
9：00	移動	企画打合せ（総務課、放課後子ども教室）	移動		親子公募 WS		移動	女満別中学校アウトリーチ①		移動
10：00		会場下見		地域資源視察		移動				
11：00										
12：00										
13：00		地域資源視察			女性部向け WS			女満別中学校アウトリーチ②		
14：00										
15：00	学校訪問打合せ	移動	地域資源視察	教職員等 WS			打合せ			
16：00			打合せ		フィードバック			フィードバック		
17：00										
18：00	地元女性部打合せ									
19：00	地元劇団（そら）交流									
20：00										
21：00										

プログラム詳細

「想像力 を育む ワークショップ 」
日時：6 月 25 日（金）15：00 ～ 17：00
会場：大空町教育文化会館ホール（ステージ）
参加者：14 名

演劇アウトリーチの実施・継続に向け、学校職員、青少年育成事業協会及び町職員の理解は必須ということで実施したインリーチ。
ソーシャルディスタンスに配慮した アイスブレイクで、参加者の心の距離が一気に縮まった後､小･中学校で行う「物語を生み出すワークショップ」を体験してもらい、その効果を実感・共有しました。
「普段おとなしい児童・生徒の意外な側面を見られる」「決まりきった人間関係に新しい風を吹かせられる」等 、児童生徒にアウトリーチを早く体験させたいという意見も出されました。

劇あそび「こどものためのハローワーク」
日時：6 月 26 日（土）9：00 ～ 11：00
会場：大空町役場議事堂文化ホール
参加者：13 名

親子（小学生）を対象に公募した劇あそびワークショップ。
日頃親が仕事をしている様子を、寸劇により再現していただき 、親がどのような仕事をしているか、仕事への想いも含めて話してもらいました。
子どもたちは、日頃家庭では、詳しく見たことも聞いたこともない親の仕事にただただ感心していました。
ワークショップ中親子で向き合い、熱心に心を通わせる姿は、参加者に、親子の絆を深めるというワークショップのねらいを達成できました。

大人だって楽しみたい「大空町昼ドラ川柳のススメ 」
日時：6 月 26 日（土）13：00 ～ 15：30
会場：大空町役場議事堂文化ホール
参加者：6 名

自治会女性部の研修として実施したワークショップ。
町を舞台にした昼ドラ川柳を考えて、想像して遊ぶ、大人の楽しみ方。
大空町のあんな場所やこんな場所で巻き起こる昼ドラな物語を『創造して想像する』と、街の見え方が変わるかもしれない…」という内容で実施をしました。
終盤には、大空町オリジナル川柳にサスペンスのエッセンスも加え、大盛り上がりとなりました。
地区間の交流を目的としておりましたが、日頃お付き合いのある方々の参加であったため、より深いお付き合いができるようになりました。

「物語を生み出す ワークショップ 」
日時：7 月 15 日（木）9：40 ～ 15：10
会場：女満別中学校3年A・B組教室
参加者：3年A組 22 名、3年B組 25 名

プロの役者さんによるお芝居「生徒からのお題」の観劇で、集中力が高まった生徒たち。続く、心と体をほぐす準備運動では、「大人でもやったことがないことは急にはできない。できないことが頭にはいい」という福田さんからのメッセージが印象に残っています。

後半は「物語を生み出すワークショップ」。さすが中学生、話の続きが気になるようなストーリーを作り上げることができ、とても完成度が高い内容となりました。

また、早めにストーリーが出来上がり、精度を高める練習に入るなど高い集中力が見られました。

インリーチでの想定どおり、「普段おとなしい生徒の意外な側面を見られる」「決まりきった人間関係に新しい風を吹かせられる」等の目的を達成できました。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

新学習指導要領が、小学校では昨年度、中学校では今年度からスタートいたしました。

その中で、社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう「 生きる力 」をバランスよく育むため、「学びに向かう力、人間性」、「知識・技能」と共に、未知の状況にも対応できるための「思考力、判断力、表現力」が重要とされています。

この「思考力、判断力、表現力」を養うため、近年需要の増えている演劇の手法を使ったワークショップを行う本事業に参加いたしました。

●企画・実施において苦労した点

何よりもコロナ禍での実施について苦労いたしました。

昨年度は実施できず、今年度も開催の直前まで緊急事態宣言、自町感染者による公共施設の閉鎖措置などギリギリまで実施の判断がつきませんでした。

企画内容としては、親子向けや女性部向けのワークショップは、世代間交流や地域間交流を促進するために、また演劇を経験したことのない人でもわかりやすい事業とするために企画を工夫いたしました。

教育関係者や対象となる組織や団体へ、内容やその効果、教育課程での位置づけ等パワーポイント・映像資料を活用し、丁寧にわかりやすく説明をするのに時間を要しました。

●プログラムを実施した成果

親子の絆の醸成、町を見つめなおす機会の場の提供、地域の人材養成などに成果がありました。

また､学校の新学習指導要領に定める「主体的･対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の参考にもなりました。

さらには､「普段おとなしい児童･生徒の意外な側面を見られる」「決まりきった人間関係に新しい風を吹かせられる」等クラス内の関係の好循環の一端を担うことができたと思っております。

●今後の展望

教職員・文化ホール・地域劇団員向けの研修を引き続き実施し、地域人材の養成を考えております。

日頃の活動の中で、様々なメッセージを多くの方に伝えていらっしゃる方の中から、地域の子どもたちに毎日の生活の中でも使える「生きる力」を伝えていくことが未来の地域づくりにつながると考えています。

そのためには、継続することが必要で、インリーチにも参加をいただいた青少年育成事業協会や町民劇団関係者と協力し、「種をまき続ける」「水をやり続ける」ことが必要と考えています。

その第一歩として、同アーティストによる町民向けのワークショップを令和３年 10 月に、その参加者による創作劇の公演を令和４年２月に実施しました。

アーティストレポート

垣根のない小さな街にある大きな可能性

福田　修志

広大な土地と垣根のない建物が続く北海道大空町の街並みは、九州に住む僕にとっては何もかもが新鮮で別世界のようでした。目に見える世界は別世界ですが、出会った人はみんな人当たりの良い人ばかり。塀も垣根もない街の姿が、そのまま人柄を作ったかのように、心に垣根がなく、地続きのような心を持ったような方々がこの街に住んでいるんだなあと、そんな印象を僕は受けました。この街に住む人々は、自分と他人との境界線をどういう風に引いているんだろうか？雪が多い地域だから助け合いが当然の環境だからなのか？農家が多いということなので、みんなで何かをやるという事を無意識に行っているだけなのか？そんなことを考えてしまうほど、大人からも子供からも「壁」を感じることが少なかった大空町は、とても魅力的な街に見えました。ですが、そんな街にも課題というものはあるもので、二つの街が合併して15 年ほどが経った大空町は「街の交流」についての課題を抱えていたので、幅広い年代の層に向けて「交流」を促す目的でのプログラムがメインとなりました。交流を行うキーポイントは、演劇が得意とする「想像力」です。

初回派遣の時は一般向けのワークショップが中心で、「子供のためのハローワーク」と題した親子向けの WS では、大人も子供も未知の職業に対する興味が尽きず、親子で話す時間作りにもなるなどの交流ができました。街の女性部の方々を対象にした「昼ドラ川柳」の WS では、ご年配のおばさま方に想像力で遊んでいただいて、笑顔いっぱいに楽しんでいる様子が印象的でした。関係者向けに実施したインリーチでは、学校関係者から劇場関係者まで集まり、「自分たちで街を作っているんだ」という意識の高さも感じられました。

２回目の派遣は学校アウトリーチが中心という構成。自己表現がしづらい中学生への実施でしたが、大空町の中学生はとても素直で想像力豊かな子供たちばかりで、とても良い時間となりました。残念ながら新型コロナウイルス感染症の関係で、中学校だけの実施で終わってしまい、小学校には行けなかったのですが、おそらく小学校に行っても、充実した時間になったのだと思います。

多くの場合、小規模学校の先生たちが子供に対して不安に感じているのは「進学して大人数になった時に、上手く自分を表現出来るのか？」ということで、その解決策として演劇をツールとして利用するのは、入口としてとても良い方法だと思います。僕は常々「表現は面白い、だけど難しい」と言うようにしています。誰かに何かを伝えるのは難しいことですが、伝わった時にはとても嬉しい気持ちになる。その気持ちを感じるために演劇を使う。誰かのことを想像したり、面白いことを誰かに伝えたくなったり。それは子供だけじゃなく、歳をとっても楽しいことであり、大人になったからといって簡単なことじゃないんだというのを今回の派遣では改めて感じた機会になりました。年齢も性別も言葉も国籍だって関係なく、色んな垣根を越えられるからこそ、演劇の需要は増えてきています。そこには街の規模は関係が無く、むしろノウハウとやる気さえあれば大都市ではなく、小さな街の方がきっと手厚いケアが出来るのではないでしょうか？もちろん、都会と比べると小さな街の方が芸術に触れる機会は少ないのだと思います。だけど機会の少なさを、厚みで補うという発想も、努力次第では可能だと思うので、街の小ささを活かした取り組みというのを担当者には粘り強く模索して欲しいと願います。

秋田県　実施データ

実施団体	秋田県
実施ホール	
担当者	文化振興課　佐藤亜希子
実施期間	下 見 派 遣　令和３年７月 20 日（火）～７月 21 日（水） １回目派遣　令和３年 12 月 25 日（土）～ 12 月 28 日（火） ２回目派遣　令和４年３月 17 日（木）
アーティスト等	アーティスト：田上豊　　アシスタント：（1 回目）村井まどか、村田牧子　（2 回目）大園康司、加賀田浩二 アドバイザー：内藤裕敬（1 回目視察）

■下見派遣内容

7 月 20 日（火）会場下見（ふれあーる AKITA、アトリオン）、打合せ

7 月 21 日（水）打合せ

■１回目派遣内容

12 月 26 日（日）13：00 ～ 16：00　高校演劇部ワークショップ①

17：30 ～ 19：30　職員インリーチ①

12 月 27 日（月）13：00 ～ 16：00　高校演劇部ワークショップ②

■２回目派遣内容

3 月 17 日（木）　14：00 ～ 15：30　職員インリーチ②　※オンラインによる実施

スケジュール

派遣回	下見派遣		1 回目派遣				2 回目派遣
月日	7 月 20 日	7 月 21 日	12 月 25 日	12 月 26 日	12 月 27 日	12 月 28 日	3 月 17 日
9：00	移動				大館市へ移動	移動	
10：00		打合せ	移動				
11：00							
12：00							
13：00	会場視察 打合せ	移動		高校演劇部 WS ①	高校演劇部 WS ②		打合せ
14：00							職員インリーチ②
15：00							
16：00					フィードバック		
17：00				職員インリーチ①			
18：00							
19：00							
20：00							
21：00							

プログラム詳細

高校演劇部ワークショップ【秋田会場】
12月26日（日）13: 00～16: 00
会場：秋田県総合生活文化会館（アトリオン）地下1階多目的ホール
参加者：10名

県内高校の演劇部員を対象としたワークショップ。会場を秋田市と大館市の２カ所とし、２６日は秋田市での開催であったが、悪天候により参加者は予定の半数の１０名となった。

参加者は、日頃、演劇部の活動において、顔を合わせていたこともあり、緊張することもなく和気藹々とした中で各メニューに取り組むことができたようであった。

特に、シェイクスピアの長台詞に挑戦する時間は、参加者たちの真剣な表情が印象的であった。

参加者からは､「普段体験できない時間を過ごすことができた」､「ワークショップの３時間ずっと楽しかった」など、満足度の高い内容であったことが伺えた。

職員インリーチ①
12月26日（日）17: 30～19: 30
会場：あきた文化交流発信センター「ふれあーる AKITA」
参加者：14名

来年度開館するあきた芸術劇場の指定管理者を対象とした職員インリーチを実施した。

内藤さんから、公共ホールとワークショップの役割について、田上さんからキラリふじみでの取組状況等について講話していただき、その後、実際のワークショップで使われているアイスブレイクを体験した。

最初は、戸惑いのような表情を見せる参加者もいたが、時間が経つにつれ、そのゲームのミッションクリアのため、意見を出し合ったり、大きな笑い声が起きたり、空気が明らかに変わっていった。

講師の話を聴き、体験することで、これまで漠然としていたワークショップの意義、効果について学ぶ良い機会となった。

高校演劇部ワークショップ【大館会場】
12月27日（月）13: 00～16: 00
会場：大館市民文化会館（ほくしか鹿鳴ホール）展示室
参加者：18名

参加者が多かったこともあり、前日の秋田地区より長めにとったアイスブレイクは、参加者の緊張をほぐし、交流を深める上では非常に効果的だったと感じた。

また、グループワークでは「ナマハゲ」を必ず入れたワンシチュエーションの創作を行った。劇作はあまり経験したことがない参加者が多かったが、どのグループからも常に笑い声が上がるほど、楽しんで取り組んでいるようであった。２地区それぞれのワーク内容は、参加者の人数やタイプに合わせたものであり、今後、自主事業を企画する上で大変参考となった。また、参加者である生徒の顧問からも「是非継続して欲しい」といった声が上がっており、演劇分野における取組の可能性を実感することができた。

職員インリーチ②
3月24日（木）14: 00～15: 30
オンラインによる開催
参加者：5名

あきた芸術劇場の指定管理者、関係者向けの職員インリーチ。内容は、アーティスト３名からの講話と質疑応答。

当日、あきた芸術劇場関連の行事と重なり、参加者は５名であった。

田上さんには、事前質問に基づき芸術監督の役割や意義についてお話をいただき、その後、現状の課題や今後の取組について活発な意見交換がなされた。

続いて、大園さんからは、コンテンポラリーダンスによるワークショップの効果等について、加賀田さんからは岡山芸術創造劇場での取組等についてお話をいただいた。

いずれも開館を控えた本県にとって、非常に参考となる内容ばかりで、今後も指定管理者に限らず、県内の公共ホール職員等に対してもこのような機会を設けていく必要性を感じるものであった。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

・令和４年６月に開館する「あきた芸術劇場」は、高い音響効果やステージ機能を持つ大ホールと、演劇、舞踊、伝統芸能等に適した舞台芸術活動の拠点となる中ホールを備えており、これら機能性の高いホールでの多目的な事業展開を見据え、音楽事業同様、演劇分野等においても、県民がより興味を持ち、鑑賞できる機会の創出が必要となる。

・劇場の開館後、指定管理者には、演劇分野も含め、多彩な芸術文化事業への積極的な取組を進めていく上で、企画制作力の向上は必須であることから、開館準備の一環として本事業への参加を希望するものである。

・また、開館に向けた機運醸成のため、本劇場をはじめ、県内各地の公共ホールにおいて今後活躍が期待される若い世代を対象としたワークショップを実施し、一流のアーティストとの交流により、演劇への興味をさらに深め、継続的な関わりや取り組みによる地域の活性化と芸術振興の広がりとなるよう本事業の活用を図るものである。

●企画・実施において苦労した点

・上記の参加動機のとおり、あきた芸術劇場の開館に向けた機運醸成と開館後の各種取り組みの広がりを目的として本事業に臨んだものの、新型コロナウイルス感染症の影響により、１回目派遣の延期、２回目派遣についても、２度の延期や一部中止など、その対応に非常に苦労した。

・秋田県の対応が、他県と異なっていた部分もあったようで、アーティストや地域創造のみなさんとうまく共有できないこともあり、それが秋田県としての姿勢や意欲面において、マイナスに取られてしまったのではないかと思う場面が何度かあった。コロナ禍という事情だけではなく、本事業に対する思いや認識を関係者間で共有する難しさを痛感した。

●プログラムを実施した成果

・いずれのプログラムも参加者の満足度は高かったように思う。特に高校生からは、日頃の部活動では得られない経験ができたようで、このような事業を継続して欲しいという声があった。

・職員インリーチでは、開館を控えたあきた芸術劇場の指定管理者が、現状抱えている課題や疑問などについて、アーティストのみなさんから様々な角度から助言をいただき、今後の管理運営における多くのヒントを得られた。本劇場の所管である秋田県としても、共通認識を図る機会となった。

・これまで、本県の文化振興において、若干の手薄感のあった演劇分野において、この事業をきっかけに参加者や関係者から生の声を聞くことができ、今後の取り組みへの期待を持つことが出来た。

●今後の展望

・この事業を一過性のものとすることなく、あきた芸術劇場や県内公共ホールで事業展開できるよう、県として働きかけていきたい。特に演劇部を有する学校からは、継続の声があがっており、今回実施できなかったメニューも含め、今後の取り組みについて検討したい。

・今回の成果を踏まえ、あきた芸術劇場の開館を迎える今だからこそ、改めて立ち止まり、本県芸術文化の中核の劇場としての役割、地域活性化のための取り組みについて考えていきたい。

アーティストレポート

地域に愛されるホールになるために

田上　豊

リージョナルシアター事業で秋田県（今回は秋田市）に出向いたのは 2019 年（令和元年）に同事業を実施した能代市文化会館以来である。豪雪シーズンに降り立った秋田駅は、下見で来た夏とは打って変わって白銀の世界だった。秋田市の雪は水気が少なくサラッとしているので、ぜひ一度積雪にダイブしていただきたい。楽しいのでオススメである。

さて、そんな秋田市では 2022 年６月にあきた芸術劇場ミルハスがオープンする（９月がグランドオープン）。秋田県観光文化スポーツ部文化振興課の佐藤さんはその開館に向けてリージョナルシアター事業へ応募されたそうだ。派遣アーティストとしては、どんな形であっても開館準備のお手伝いができることは大変光栄であった。また、秋田県内のコロナへの警戒レベルに左右されながらの実施となったが（２回目の現地派遣は中止となった）、この状況下で参加していただいた方々には感謝が尽きない。

秋田リージョナルで展開したのは大きく二つ。高校演劇部向けの表現ワークショップ、劇場職員向けのインリーチ。これらの全てが芸術劇場の開館に向けて企画されたものである。演劇部に関しては秋田市と大館市の二箇所で実施した。それぞれに集った高校生達の「芸術劇場誕生に対する大いなる期待」が凄かった。こういった熱を帯びた層への自主事業の企画立案をぜひ積極的に行っていただきたいし、併せて演劇部以外の中高生でも劇場に関心を寄せられる、そんな事業もバランスよく実施されることを期待している。

劇場職員向けインリーチの開催場所となったのは、あきた文化交流発信センター（ふれあーる AKITA）。このスペースは商業ビル６階にあり、こういった空間を活用した自主事業も今後展開していきたいとの話だった。残念ながら職員インリーチは２回目の実施がオンライン開催になってしまったが、それでも画面上で様々な意見交換ができたことは有意義であった。今後も必要とあらば可能な限りサポートできたらと考えている。

東北に「芸術劇場」が誕生するのは素晴らしいことだ。劇場を主戦場とする我々アーティストとしてもこの上なく喜ばしいと感じている。今後、ミルハスが芸術劇場としてどういったカラーを打ち出し、どのように地域に根ざした事業を展開するのか楽しみで仕方がない。夏の下見の際、ミルハスはまだ建設途中で工事が行われていたし、冬に滞在した際は大雪のために遠くから眺めることしか叶わなかった。いつか劇場内部の様子を一度はこの目で見てみたい。パンフレットで拝見する限り、なかなかのサイズの芸術劇場である。劇場運営における指針をしっかりと定め、大きな理念を持ち、地域の方に愛される（劇場が出来てよかったと言われる）ホールになっていただきたいと切に願っている。劇場を取り囲むように存在する蓮池。ハスの花言葉は「清らかな心」だそうだ。開館すると劇場職員は怒涛の忙しさが襲いかかってくることが予想されるが、いつの時も清らかな心だけは忘れないでほしい。これからのあきた芸術劇場の発展を願い、微力ながらエールを込めて。

福井県大野市　実施データ

実施団体	大野市
実施ホール	
担当者	地域文化課　勝矢まり絵
実施期間	下 見 派 遣　令和４年１月 12 日（水）～１月 13 日（木） １回目派遣　令和３年７月７日（水）～７月 10 日（土） ２回目派遣　令和４年２月１日（火）～２月３日（木）
アーティスト等	アーティスト：多田淳之介　　アシスタント：（１回目）佐山和泉、大川潤子　（２回目）中埜コウシ、松本志帆子

■下見派遣内容

1 月 12 日（水）打合せ、地元アーティストからの聞き取り

1 月 13 日（木）公民館職員からの聞き取り、公民館施設視察

■１回目派遣内容

７月８日（木）10：40 ～ 12：30　大野高等学校アウトリーチ①（2 年 D 組）

13：10 ～ 15：00　大野高等学校アウトリーチ②（2 年 B 組）

16：00 ～ 17：00　職員インリーチ①

７月９日（金）　8：40 ～ 10：30　大野高等学校アウトリーチ③（2 年 C 組）

10：40 ～ 12：30　大野高等学校アウトリーチ④（2 年 A 組）

■２回目派遣内容

２月２日（水）10：00 ～ 12：00　職員インリーチ②

13：00 ～ 15：00　職員インリーチ③

２月３日（木）10：00 ～ 12：00　職員インリーチ④

スケジュール

派遣回	１回目派遣				下見派遣		２回目派遣		
月日	７月７日	７月８日	７月９日	７月 10 日	１月 12 日	１月 13 日	２月１日	２月２日	２月３日
9：00	移動		大野高校 アウトリーチ③	移動	移動	公民館職員聞き取り、施設視察	移動		
10：00		大野高校 アウトリーチ①	大野高校 アウトリーチ④					職員 インリーチ②	職員 インリーチ④
11：00									
12：00						打合せ			
13：00		大野高校 アウトリーチ②	フィードバック					職員 インリーチ③	フィードバック
14：00	打合せ 会場下見				打合せ	移動	打合せ・準備		
15：00	大野高校打合せ 下見		打合せ		地元アーティスト聞き取り				移動
16：00	地域資源視察	職員 インリーチ①			打合せ				
17：00									
18：00									
19：00									
20：00									
21：00									

プログラム詳細

大野高校アウトリーチ
7月8日（木）10：40 ～ 12：30（2年D組）、13：10 ～ 15：00（2年B組）
7月9日（金）8：40 ～ 10：30（2年C組）、10：40 ～ 12：30（2年A組）
会場：福井県立大野高等学校　参加者：32 名（D組）、33名（B組）、27名（C組）、30名（A組）

演劇の手法を使ったワークショップを大野高校で行った。

アーティストとアシスタント（プロの俳優２人）の自己紹介後、参加者全員で「落ち込んで」「喜びを隠して挨拶」など、条件に合わせながら部屋の中を 10 秒間歩きまわることで、「演じること」を体験した。また、全員でエア縄跳びを行い、人間の身体を使えば想像力で見えないものが見えるようになることや、参加者全員が同じ意識で取り組むことを演技のコツとして学んだ。

その後、５～６人ずつのグループに分かれ、「走れメロス」の台本を基に各グループで短い劇を作った。劇の内容は、俳優２人に王とメロスを演じてもらい、高校生はその場面に出てくる家来や死体などを好きに足して演じるというもの。発表の後に、多田さんから、考える人が違えば想像する姿も違うので、全く同じ台本を使って違う劇が出来ること、演劇に限らず日常生活でも「何で自分はこうなのか？」「何で友達はこうなのか？」と考えることが必要だと伝えられた。

学校の先生からは、「普段の学校活動以外の生徒の様子を見ることで、子供達を見直す機会になった。」「それぞれのクラスの色が見え、さらにクラスの輪が広まった。」との言葉をいただいた。

職員インリーチ①
7月8日（木）16：00 ～ 17：00
会場：多田記念大野有終会館　305・306号室
参加者：19名（うち公民館職員13名）

文化講座担当職員向けワークショップ。

全員で輪になり、名前を呼ばれた人は別の人の名前を呼んで動作を伝えるゲームを行った。「手を叩く」なども追加し、動作だけを回す場合には、相手が受け取っているか確認しないと伝わっていかないことを体感し、コミュニケーションも相手に伝えるだけではなく、相手が受け取っているか確認しながら行うことが大事だと教わった。

次に、「好きな色は？」等でグループ分けを行った。普段と違うグループ分けが出来ることや、「好きな○○は？」だと言い出しにくい子供がいることもあるため、血液型など、既に答えが決まっている質問でグループ分けをするというようなポイントを教わった。

その後、全員で会場全体を歩き回り、「２人組で猫」というような指示に合わせて体で表現した。

最後に、５人組で「大野のどこかを表現する」というテーマを体を使って表現し、次に「５０年後、今表現したところに何かの変化が起きる」を表現した。５０年後どうなっているのか、表現を相談する中で色々な意見が出ること、まちに変化が起きた時に自分はどう思うのかを考えることを通し、まちへの想いを知るきっかけとなることなどを体験し、ワークショップがこのような使い方も出来ることも学んだ。

職員インリーチ②
2月2日（水）10：00 ～ 12：00
会場：多田記念大野有終会館　305・306 号室
参加者：15 名（うち公民館職員 11 名）

自己紹介、ガイダンスの後、公民館職員から、担当する地域の紹介を行った。人口減少や少子化・高齢化、公民館事業参加者の固定化などの課題とともに、地域の自然や街並みの美しさ、活発な地域活動など地域の自慢も含めて、紹介があった。

次に、公民館が開催する講座の紹介を行った。

夏休みの小学生の体験学習や、親子でフォト散歩プラスＪＲ利用、災害食 de ランチなど、子供や親子を対象としたもの、高齢者向けのスマホ講座など、人気の講座が紹介された。

その他に、手漉き和紙教室やとち餅づくりなど、地域資源を活用した様々な講座が紹介された。

職員インリーチ③
2月2日（水）13：00 ～ 15：00
会場：多田記念大野有終会館　305・306 号室
参加者：16 名（うち公民館職員 12 名）

多田さんから「地域の特性から文化を考える」についてお話があり、地域の文化や歴史、地理、生活環境など、長所だけでなく短所も利活用し、未来に向けてどんな地域を創りたいかビジョンを持つことが大切だと学んだ。また、「演劇は何ができるか」について、教育では大きな声を良しとするが、演劇の手法を使ったワークショップでは、小さな声の人は、その特性を生かした役割を持ち、小さな声も大きな声も良しとする。演じることを通して、人間について確認したり、発見したり、共感したりすることができることを学んだ。

次に、多田さんとアシスタントの中埜さん、松本さんから、ワークショップなどの事例紹介があった。

多田さんからは、北九州市民とともに市民劇を創り、発表するという、３年がかりのプロジェクト「冬の盆」などの話があり、①一つの講座の中に何かをプラスする。②一つの講座のツールを使っていろんな人がつながる。③一つの講座にいろんな要素を混ぜ込んでいく。という、３点を常に意識することなどのアドバイスをいただいた。

松本さんからは、藁工ミュージアムや高松ワークショップラボの活動である「わらこう夏祭り」や「防災キャンプ」など、美術活動を通したワークショップや地域づくりの事例紹介があった。

中埜さんからは、NPO 法人福井芸術・文化フォーラムや劇団「演衆やむなし」、そこでの活動である「まちげき」や「Arts in Education」など、地元に密着した事例紹介があった。

いずれの事例も、楽しみながら参加者自らが考え、動き、つながるといった要素があり、文化芸術活動がまちづくりへとつながる様子を実際に目にすることができた。

職員インリーチ④
2月3日（木）10：00 ～ 12：00
会場：多田記念大野有終会館　305・306 号室
参加者：16 名（うち公民館職員 12 名）

３人ずつのグループに分かれ、多田さんからのアドバイスを参考に、実際に講座を組み立て、発表した。

講座を考えるにあたり、対象世代を子供（０歳～中学生）、ミドル（高校生～ 60 代）、シニア（70 代～）と分けて考えた。

まず、各世代の公民館に対するニーズについて話し合いを行ったところ、どの世代にも共通して「居場所」や「交流する場」というようなキーワードが出てきた。多田さんから「『教える』でも『教えられる』でもなく、『居たいならただ居ていいよ』という地域の保健室のような場に公民館がなれると良いかもしれない。」とのまとめがあった。

次に、【出来る限り何かが連携していること (ex. スキー×英語＝英語でスキー教室)】を条件に、具体的な公民館講座について話し合った。シニアが先生となり子供が生徒になるものや、反対に中高生がシニアに教えるもの、また、世代を越えて一緒に取り組むものなど、世代を連携した講座の提案が多くみられた。

最後に、当市が運営する「COCONO アートプレイス」という美術館類似施設と、当市の特徴的な文化活動である「小コレクター運動」、「創造美育運動」とに関わる講座について話し合った。[これまで] の大野市の特色ある文化芸術活動を生かした講座や、地域のアーティストや子供など [これから] の人たちを支援するような講座が提案された。

一連の話し合いを受けて、「中高生が先生になった街歩きが出来ると、大人とは違う見方が発見出来るかもしれないので、面白いかもしれない。」(多田さん)、「以前、大野で行われていた、美術活動を通して子供を育てる「創造美育」という活動を絶やさないよう、子供たちに思いっきり創作できる場所を提供できるといい。また、そこは、創作している子供を見に行けるような場にもなると良い。」(松本さん)、「ＣＯＣＯＮＯアートプレイスで子供の創作活動を行い、シニアに安全管理をお願いすることで、子供とともにシニアの居場所にもなると素敵である。」(中埜さん) などの講評をいただいた。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

現在、大野市では、文化関係団体の高齢化や加入者数の減少、文化活動に参加する若者の減少等が見られ、若い方をはじめ、より多くの市民の方が文化活動に関心を持ち、活動に参加していただけるような方策を模索しています。

その方策の一つが、様々な世代の市民が「参加してよかった」と思える文化講座やワークショップを開催することです。当市において文化講座やワークショップを開催しているのは、地域文化課の職員と公民館職員です。まずは、これらの職員の企画力や実践力を養うことが大切であると考え、この事業への参加を希望しました。また、職員が、若者が好む新たな文化芸術のジャンルに追いつくことも必要です。演劇という文化活動に馴染みがなく、当市にとっては新たな分野であることも大きな魅力の一つでした。

●企画・実施において苦労した点

コロナ禍により、スケジュールの変更を余儀なくされ、当初予定していた下見を５月に行えず、７月の１回目派遣の際に下見とアウトリーチを実施しました。さらに、新型コロナウイルス感染防止のため、アウトリーチを見学する職員の数を少数に制限しました。そのため、職員がインリーチを受けるにあたり、ワークショップのイメージを共有出来づらくなりました。事前に職員の意識付けを行うことや、職員自身にとって演劇が身近ではないため、何故演劇なのかという抵抗感を払拭するのに苦労しました。

また、インリーチで当市の特徴的な文化活動である「小コレクター運動」や「創造美育運動」を取り上げましたが、この活動と関わりの少ない公民館職員との繋がりづくりにも苦労しました。

●プログラムを実施した成果

高校生対象のアウトリーチでは、馴染みのない演劇に触れる戸惑いも見られましたが、すぐに友達と協力してアイデアを出し合って演出・演劇する姿が見られました。要所要所で、多田さんやアシスタントのお二人から物語を深く考えるアドバイスがあり、グループごとの個性が磨かれていきました。また、奇抜な発想も些細な発想もすべて受け入れられ、高校生たちは自由に生き生きと表現する楽しさと、満足感とを得たようでした。

高校生へのアンケートでは、「プロの俳優さん達の表現力に圧倒された。」「演劇に興味を持った。」「自分達で創ることの素晴らしさを体験出来た。」という感想が多くみられ、演劇に対する興味を高められたと思います。また、「これからは自分の感情をもっと表現できるようにしたい。」「何においても学ぶ意欲、姿勢が大切だと思った。」「少し自分に自信が持てた。」など、生徒が自分自身を考えてみる機会にもなりました。先生方については「意外な生徒の活躍が見られた。」など、演劇が引き出す可能性を実感されていました。さらに、市職員がアウトリーチの様子を見ることで、指導者の姿勢や、たった２時間でこれだけ生徒達に変化があるのかと肌で感じることが出来ました。

インリーチでは、コロナ禍により演劇の手法を用いたワークショップは受けられませんでしたが、多くの事例を学び、地域のテーマから講座を企画することを体験しました。職員へのアンケートでは、「文化芸術がまちづくりや地域の方々とのつながりを深める手段として利用できることを学べた。」「地域の長所・短所から講座を考えることが印象的だった。」「一つの講座でもいろいろな要素を取り入れることで地域の課題解決にもつながることを確認した。」「他の公民館職員との交流ができてよかった。」などの感想がありました。

この事業が始まって以来、多田さんや地域創造のスタッフの方々から、常に「どのような地域を創っていきたいのか」という問いかけがありました。最初はピンときませんでしたが、事業が進むにつれ、文化芸術の講座やワークショップが開催方法次第で地域づくりにまで発展するということに気づかされ、まさに、文化振興を担当する職員や公民館職員が目指すべきものを学習させていただいたと感じています。

●今後の展望

高校生対象のアウトリーチは「クラス担任からの評判はとても良く、今後も継続し、市と高校で育てていける事業になるといいなと思っている。」と評価をいただきました。市内には高校が２校あるため、来年度は今回とは違うもう１校にアウトリーチを実施する予定です。

インリーチでは、文化芸術に関するワークショップの事例を実践者ご本人から多数ご紹介いただき、大変多くの情報を得たと同時に、熱い思いを持って果敢に挑戦する姿は刺激となりました。また、参加した職員からも、他の公民館等と交流ができてよかったとの感想もあり、今回の事業をきっかけに、職員が研修を積み重ね、職員同士の交流を継続していきたいと考えています。

また、常に「どのような地域を創っていきたいのか」を意識し、ただ「楽しい」と思える講座の開催だけでなく、様々な要素を取り込んだ、視野の広い講座の開催を目指していきたいと考えています。

アーティストレポート

地域資源と地域課題

多田淳之介

福井県大野市は福井県内最大の広さで、天空の城大野城を望む城下町と、市面積の大半は山間部が占めています。昭和 29 年に大野郡の 8 つの旧町村が合併、その後もいくつかの周辺自治体の編入を経て現在の形になっていますが、現在も旧町村ごとの地域色が強く現れています。今回のリージョナルシアター事業では、応募当初は大野市立の劇場を作る計画があり、その準備段階としてこの事業を活用する予定でしたが、その計画は白紙となり担当者も異動となってしまい、新担当者との再スタートとなりました。オンラインでの打ち合わせを数回させていただいたものの、福井県の新型コロナウイルス感染症対策として県外からの人の受け入れができないということで事前の下見ができないまま 1 回目派遣を行うというイレギュラーな実施となりました。1 回目派遣の高校アウトリーチと公民館主事向けのインリーチは無事に終えましたが、その際大野市の多くの地域資源を目にし、2 回目派遣に向けて準備が必要だと判断して 1 回目派遣と 2 回目派遣の間に下見を入れるというさらにアクロバットな展開となりました。

例えば大野市では 1950 年代に小コレクター運動という、市民が新進気鋭の若手アーティストの作品を購入し支援する運動が展開され、当時まだ無名だった靉嘔（あいおう）、キムラリサブロー、池田満寿夫、草間彌生など名だたるアーティストの作品が市内の各家庭に飾られています。市内の小学校、商店街、飲食店、どこに行っても一流のアーティストの絵画が飾ってあり、そして 2018 年には小コレクター運動作品の展示や市民の文化拠点として COCONO アートプレイスという古民家を改装したアートスペースもオープンしています。さらに小コレクター運動は「美術によって子供の想像力を健全に育てる」という現在のワークショップの考えの根本のような創造美育という美術教育運動に端を発していることも知りました。

地域資源がそこで生活している人には気づきにくいのは地域あるあるですが、御多分に洩れず大野市でも小コレクター運動について知っている市民は多くはないそうです。

そこで急遽決まった下見では COCONO アートプレイスの利活用という観点で地元のアーティストや公民館主事の方に話を伺いました。そして 2 回目派遣では、地域資源の活用、地域課題の解決に向けた公民館講座にフォーカスして公民館主事の方へのインリーチを行うことになりました。内容としては、まずは僕とゲストによる演劇や劇場、文化施設と地域の協働についてのレクチャー、事例紹介、その後参加者によるグループディスカッションの中で、各地域の課題のシェアから解決に向かうためのブレストを行い、公民館企画を考えてもらいました。各公民館の地域課題をシェアする中では各地域に対する発見も多く、企画を考える中で公民館同士の交流や連携の可能性も見出すことができました。特に世代間交流を取り入れた企画は今後期待できると思います。

他にも大野市には、町中で汲める湧水、大野城や九頭竜湖などの観光スポット、日本一選ばれた美しい星空、400 年以上続く朝市など、誰でも楽しめる地域資源があふれています。例えばこの地域資源に世代間交流の仕組みを足すだけで地域課題への取り組みになります。ぜひ今回のリージョナルシアター事業をきっかけに地域間のネットワークと各地域に合ったアプローチを組み合わせて、そして地域資源を活かしながら地域課題に取り組んでいただければ嬉しいです。そして街に溢れるアートをその一手段として活用してくれることを願っています。

掛川市二の丸美術館（静岡県掛川市）実施データ

実施団体	公益財団法人掛川市文化財団
実施ホール	掛川市生涯学習センターほか
担当者	宇野芽久美
実施期間	下 見 派 遣　令和３年７月 11 日（日）～７月 12 日（月） １回目派遣　令和３年 10 月 29 日（金）～ 11 月１日（月） ２回目派遣　令和４年２月 26 日（土）～３月１日（火）
アーティスト等	アーティスト：有門正太郎　　アシスタント：（1 回目）門司智美、木下海聖、（2 回目）門司智美、野村法可

■下見派遣内容

7 月 11 日（日）意見交換会（地元アーティスト、施設管理職員）、現地視察（掛川城周辺）

7 月 12 日（月）意見交換会（市職員）、現地視察（日坂地区）

■１回目派遣内容

10 月 30 日（土）　9：30 ～ 12：30　マチ歩きワークショップ①

14：00 ～ 17：00　マチ歩きワークショップ②

10 月 31 日（日）13：30 ～ 16：00　アーティスト対象ワークショップ

■２回目派遣内容

２月 27 日（日）13：30 ～ 16：00　財団職員・施設職員・市役所職員等インリーチ

２月 28 日（月）13：30 ～ 16：00　学校教職員対象ワークショップ

スケジュール

派遣回	下見派遣		1 回目派遣				2 回目派遣			
月日	7 月 11 日	7 月 12 日	10 月 29 日	10 月 30 日	10 月 31 日	11 月 1 日	2 月 26 日	2 月 27 日	2 月 28 日	3 月 1 日
9：00	移動		移動	準備 まち歩き WS ①			移動			
10：00	↓	日坂地区 視察	↓	↓		フィードバック	↓			フィードバック
11：00	昼食	↓	↓	↓		↓	↓			↓
12：00	打合せ	昼食	↓	昼食・準備	準備	移動	↓			移動
13：00	↓	意見交換会	打合せ	↓	アーティスト WS	↓	昼食	準備	準備	↓
14：00	意見交換会	打合せ	↓	まち歩き WS ②	↓	↓	打合せ	職員インリーチ	学校教職員 WS	↓
15：00	美術館周辺 視察	↓	↓	↓	↓	↓	会場下見	↓	↓	↓
16：00	↓	移動	↓	↓		↓	↓			↓
17：00	↓	↓	会場下見			↓				↓
18：00		↓								
19：00		↓								
20：00										
21：00										

プログラム詳細

掛川不思議発見！マチ歩き①
10 月 30 日（土）9：30 ～ 12：30
会場：まちかど LABORATORY、掛川城周辺
参加者：12 名

地域資源を活用しながら、美術館の認知度を向上させることを目的として企画したプログラムです。

午前のグループは、子どもから高齢者までの幅広い年齢で行う事ができました。受付でニックネームを自分で決めてもらい、散策に行く前に集まったみんなでアイスブレイクを行いました。その後、2 グループに分かれて掛川城周辺を散策しました。カメラはグループの一人が持ち、それぞれ面白いと思ったポイントをカメラ係に撮影してもらいます。実施前は参加者が自分で持っているカメラ機器で撮影するほうが遠慮が無く撮れて良いのでは？と思っていたのですが、写真を撮ってもらう時に「面白いポイントを伝える」という一連のコミュニケーションが、このマチ歩きを面白くしている要因であると思いました。マチ歩きというロケーションも手伝って、打ち解けやすくなっていたと思います。その後、撮影した写真にそれぞれ自由に描き込みをし、タイトルをつけて発表し合いました。普段とは違った視点で風景を見ることが難しいと言っていた大人も、子どもの発想力の自由さを目の当たりにして、とても刺激になった、と言っていました。異年齢交流としても面白いプログラムだと思います。

掛川不思議発見！マチ歩き②
10 月 30 日（土）14：00 ～ 17：00
会場：まちかど LABORATORY、掛川城周辺
参加者：10 名

午後の部は子どもの参加が無く、平均年齢が高めのグループで行われました。最初のアイスブレイクは午前の部よりもじっくり行いました。ウォーキングイベントだと思って参加される方が多く、WS の内容に最初は戸惑っていましたが、有門さんの軽快なトークで次第に参加者のみなさんもゲーム感覚で楽しむ空気になっていきました。午前の部も午後の部も美術館に立ち寄り、写真を印刷する過程を行いました。美術館を知っていたけど来たことが無かった人や、存在を知らなかった人もおり、美術館に興味がなかった層へアプローチする方法として、マチ歩きのプログラムは効果的であると感じました。

アーティスト対象ワークショップ
10 月 31 日（日）13：30 ～ 16：00
会場：掛川市生涯学習センター　第 2 会議室
参加者：11 名

当財団の学校アウトリーチ事業で派遣しているアーティストを対象に「アーティストが学校へ行く意味とその効果について」をテーマにワークショップを行いました。

アーティストが子どもたちに与える刺激について有門さんよりお話を聞きながら、実際に有門さんが学校で行っているプログラムを体験しました。有門さんの演劇的手法を用いたプログラムは、様々な視点から物事を見る力を引き出す事ができ、実際に体験したアーティストは新しい視点で物事を見る柔軟性の大事さを学びました。

有門さんのプログラムを受けて「楽しいと感じる気持ち」「固定概念にとらわれない思考」を養うことができる文化・芸術の力は、子どもたちの意外な側面を引き出すことができると実感し、今後自分たちが学校アウトリーチを行う際に意識していきたいという感想をいただきました。

演劇的手法をつかったまちづくり・施設活性化を考えるワークショップ
2 月 27 日（日）13：30 ～ 16：00
会場：掛川市中央図書館　会議室 B
参加者：19 名

財団職員と市職員、市内外の文化施設管理職員を対象に「演劇的手法をつかったまちづくり・施設活性化について考える」をテーマにしたワークショップを行いました。

最初に自分のニックネームを考えて、普段の自分の名前を一旦脱ぎ去ります。有門さんがみんなの緊張をほぐすように軽快なトークを交えながら、お互い数十秒で挨拶を全員に行ったり、答えの無い椅子取りゲームを行い対策をみんなで考えたり、見え方によって様々な捉え方の出来る絵をみんなで見るというアイスブレイクを、1 時間 30 分程かけて丁寧に行いました。その頃には参加者の間に流れる空気は、この空間にいることを楽しんでいる雰囲気になっていました。その状態でグループに分かれて「地域課題＋アート」を題材に企画提案をしました。自由な発想が許される空間は自然とワクワクする企画が生まれていたのが印象的でした。

創造的な発想には思考の柔軟性が必要です。自分の意見を自由に発言できてワクワクする空間は、相手の意見を受け入れる柔軟性にも結びつきます。他団体とのコミュニケーションにも効果的であると感じました。この自由な発想の場作りは今後の事業にも活かしていきたいと思います。

演劇的手法をつかったアウトリーチプログラムを体験してみよう！
2 月 28 日（月）13：30 ～ 16：00
会場：大日本報徳社　仰徳記念館
参加者：9 名

掛川市内の小中学校、幼保園の教職員を対象に「アーティストが学校へ行く意味・効果」を考えていただくために行いました。有門さんが学校で実際に行っているアウトリーチプログラムを教職員の先生が受ける事でその効果や目的を実感していただきます。

有門さんは、学校や園の先生以外の大人が子どもたちと接する事で、子どもたちの新しい個性や自己表現の発見に繋がることを説明しました。実際にプログラムを受けた先生は「普段の教育現場で子どもたちと接する際の参考となった」「いろいろな視点がある事に改めて気付いた。どの視点もその子の個性。難しい個性も逆転の発想で長所として伸ばしていきたい」という感想がありました。アーティストのプログラムは子どもだけではなく教職員にもクリエイティブな刺激があり、多様な視点を受け入れる大切さを改めて実感する場となりました。

多くの先生が積極的にアートによるアウトリーチを教育現場へ活かす動きが浸透すれば、子どもたちの新しい自己表現の発見に繋がるので、今後も積極的に先生方の理解者を増やして行きたいです。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

当財団は掛川市が所有する掛川市二の丸美術館、掛川市ステンドグラス美術館の指定管理者として、美術館運営、文化振興事業等に取り組んでいます。美術館の特別展の企画の他、体験講座や美術館の特色を活かしたミュージアムコンサート、文化振興事業では学校アウトリーチの他、市民活動サポートの機関を設立し、市民が自主的に文化芸術に触れる機会の拡充を目的として活動しています。美術館の指定管理を受けているので、管理施設がより活性化するように、両館の市内外における認知度の向上を図りたいと考え、固定概念を壊す意味でも新しい視点の発見に繋がるようリージョナルシアター事業へ応募しました。

●企画・実施において苦労した点

管理施設がホール施設ではなく、美術館施設のみであるという点で活動場所の確保に悩みました。
最初は美術館ロビーをホールのように利用すればと考えていたのですが、ロビーの使用には制約が多く、多目的ホールというわけではないので企画した内容を実施するには手狭かつ機能面でも悩まされました。
美術館そのものを会場にするのではなく、美術館を寄り道のように使った企画を練り始めてからは企画の自由度も高く、違った施設とも連携ができるので視野が広がりました。

事業の主旨を財団内、協力者、参加者へ理解していただくことに苦労しました。
実際に派遣が始まってから自分自身もこの事業の効果や目的を理解した部分があり、上手く説明できなかった事が苦労した点です。積極的に地域創造や有門さんへ質問等をするなりして理解を深めていれば、より効果的なプログラムを組み立てられたのではないかと感じました。

●プログラムを実施した成果

施設活性化として、会場を直接美術館で実施しなければと考えていましたが、周りの施設や資源を使って美術館に絡める複合的なアプローチを学びました。幸いにも管理する美術館の周辺は「歴史文化ゾーン」として様々な歴史的建造物や見所のある場所にあふれています。それを利用しない手は無いと思い、周辺を散策しながら美術館に「立ち寄る」コースを考えることができました。視点を変えた発想は、参加者目線でも主催者目線でも新鮮で、柔軟な発想の大事さを実感する事ができました。

また、ハードルの高かった「演劇的手法」を活用する事について、実際にプログラムを実施して効果を目の当たりにしたからこそ、「演劇的手法」である「アート」の可能性について現実的に考える事ができました。課題や問題そのものずばりを考えるのではなく、「アート」という漢方的効能を持った接着剤を活用することによって、コミュニケーションを構えること無くできることは、子どもには言うまでも無く、固定概念でがんじがらめになった大人にこそ有効であると感じる事ができました。

●今後の展望

応募した目的である「施設活性化のための新しい視点の発見」という事を踏まえて、演劇的手法を活用した他団体との意見交換やプログラムを実施することで、そのヒントを得ることができました。文化芸術の力が、人や物、地域の課題などに対して、接着剤のような効果で活用していくことが出来れば、財団の事業や市民の生活の中に自然と「アート」が住み着き、クリエイティブな掛川市のまちづくりに繋がって行くと思います。「アート」の持つ「新しい視点を発見する力」を活用しながら、固定概念にとらわれない柔軟な企画の立案ができるよう活かしていきます。

令和２年度に設立した市民文化芸術人材バンク「かけがわアーツ」を、今回得たヒントを活かしながら積極的に「アート」の可能性を学校や美術館施設等で活用していきたいです。継続的に事業を実施することで美術館の認知度向上も目指していきます。

もっと市民に耳を傾け、この街を遊ぶ

有門正太郎

静岡県掛川市は人口 11. 4 万人、最近は「かけがわ茶エンナーレ」などを開催し市民とアートを結ぶ試みも多く見られます。掛川市文化財団はホールを持たず、管理している掛川城敷地内にある二の丸美術館を中心にプログラム作りを始めました。演劇のプログラムは初めてと言うこともあり、街歩きプログラムとアーティストを対象とした WS、市職員、財団職員向けのコミュニケーション WS を行いました。

演劇的手法ってなんだ？

事前研修会で担当者と話し、リージョナルシアター事業でどう演劇プログラムを構築していくのか、課題が明確な場合は案が出やすいのですが、今回は下見派遣で地域資源や風土などを実際に見学しながらプログラムが決まっていきました。当初は二の丸美術館での WS を希望していましたが、開館した状態での実施であり、WS ができそうな場所がロビーのみという事もあり、街歩きのルートの中に美術館も含む形になりました。

初めて演劇のプログラムを行う事もあり、表題にもある演劇的手法という言葉が理解されづらかったなと感じ、いい機会なので私なりに書いてみようと思います。

演劇は総合芸術と言われるように、様々な分野が重なって構成されています。

演劇公演で言えば、脚本、照明、音響、美術、衣装、道具、俳優、などがあたります。

このリージョナルシアター事業では演劇の内面的側面、想像力やコミュニケーション、創造性などに働きかけるプログラムを演劇的手法と捉えています。

どうしても「演技指導」や「大きな声でセリフを言う」事が演劇と思われる部分が多いのですが、プログラムを体験してもらうと「思っていたのと違う」と感じることも多いようです。今回の街歩きワークショップも普段とは違う視点でモノを見る「見立て」を行いながら街歩きをするプログラムで想像力を喚起させ、普段の街並みが違って見えるプログラムになりました。

今回はコロナ禍で市民対象よりもクローズされた対象になった傾向ですが、結果的に良かった印象です。実際に教育現場でアウトリーチを行っているアーティスト向けの WS では、普段どのようなプログラムを行なっているかデモ実演して頂き、そして実際に私のプログラムも体験し、何故教育現場にアーティストが出向くのか等の話は有意義でした。教職員向けの WS でも声かけの仕方や大切にしている部分など実際に現場の声が聞けたことも貴重でした。

市職員、財団職員向けプログラムでは、夢のような架空の事業をプレゼンし合ったのですが、現実不可能なアイデアが沢山見受けられ、イキイキした参加者が印象的でした。

フィードバックから行動へ

担当者がしっかりとこの事業に向き合い、今後どのように発展すべきか模索しながら行なって来たのだと感じ、大変に意味のある事業だったと感じました。

最後のフィードバックでは他の職員の方にも参加頂き、今後の展開含め今回のリージョナルシアター事業の感想を頂きました。

「良かったけど」「意味あったけど」「この後これをどう発展するか見いだせない」

このような意見が多く、しかしはっきりと問題意識を伝えてくれた事に何でも話せる関係性にはなれたかなと前向きに感じました。

芸術の効果がはっきりと見えるには時間がかかります。掛川市は他の自治体に比べ積極的に芸術を信じている行政だと思います。あの架空のプレゼンの時のワクワクした瞬間、普段とは違ったモノを見つけた市民の民さんの笑顔、遠回りなようだけどそれこそ機械では真似できない人間らしらさが養われる瞬間だと思います。

美味しいお茶を飲みながら、美味しい空気を吸いながら、もっと市民と一緒に街を遊んで欲しいと思いました。

枚方市総合文化芸術センター（大阪府枚方市）実施データ

実施団体	枚方市
実施ホール	枚方市総合文化芸術センター
担当者	岡本京子（枚方市）・三島亜由美（枚方市総合文化芸術センター　指定管理者　アートシティひらかた共同事業体）
実施期間	下見派遣　令和３年10月11日（月） 派　　遣　令和４年２月11日（金・祝）～２月13日（日）
アーティスト等	アーティスト：ごまのはえ　　アシスタント：西村貴治、仲谷萌

■下見派遣内容

10月11日（月）企画内容打合せ、下見（イベントホール、創作活動室）、枚方市総合文化芸術センター館内視察、「枚方市」駅周辺の視察

■派遣内容

２月11日（金）13：00～17：00　中高生演劇体験ワークショップ①
（楽器を使った音作り体験、照明・舞台の紹介、グループ分け　など）

２月12日（土）13：00～17：00　中高生演劇体験ワークショップ②
（創作、照明講座　など）

２月13日（日）13：00～17：30　中高生演劇体験ワークショップ③
（創作、発表、振り返り　など）

スケジュール

派遣回	下見派遣	1回目派遣		
月日	10月11日	２月11日	２月12日	２月13日
9：00				打合せ
10：00		打合せ・仕込み・準備等		中高生演劇体験WS
11：00		↓	打合せ・仕込み	
12：00				
13：00	打合せ・下見	中高生演劇体験WS①	中高生演劇体験WS②	
14：00	↓			
15：00	市内視察			
16：00		↓	↓	↓
17：00				
18：00				
19：00				
20：00				
21：00				

プログラム詳細

「みんなでつくる演劇体験ワークショップ」1日目
2月11日（金・祝）13：00～17：00
会場：枚方市総合文化芸術センター ひらしんイベントホール
参加者：11名（対象：中学生・高校生）

３日連続講座の初日は、シアターゲームを使った自己紹介で互いのニックネームを覚えることからスタート。続いて、中高生らは演劇の音作りを学び、講師のごまのはえさんが持参した数々の民族楽器や手作り楽器の紹介を聞き、講師が楽器を使って作った「花火」の音のデモンストレーションを鑑賞。その後、２～３人のグループに分かれ、各々配布されたお題カードの「踏切」や「夕立」「失恋」などのテーマに沿って音を作り、何の音かを当てるゲームを実施。続いて、お題カードで創作した音を順番に組み合わせ、アシスタントの俳優が演じる動きに合わせて効果音を付ける体験も行った。音作り体験の後は、創作で使用する「古事記」から抜粋したテキストの内容確認、ホールスタッフによる照明機材・舞台設備の紹介と使用上の注意、講師主導でテキストを読み合わせ、実際に照明や楽器を使って役者が演じる立ち稽古を行い、翌日からの創作活動に必要な知識などを得た。最後に、講師からグループ分けの発表があった。

「みんなでつくる演劇体験ワークショップ」2日目
2月12日（土）13：00～17：00
参加者：11名

本日の創作の流れを全員で共有し、会場をイベントホール、創作活動室に分かれてＡ・Ｂ各チームごとに創作開始。両チームにアシスタントが一人付きながら、中高生主導で話し合いを進め、演出、役者、音響、照明などの役割分担を決定。続いて、台本の疑問点やイメージなどについて話し合い、アシスタントや講師と一緒に作品イメージを共有した上で、舞台をどう使い、どのセリフを役者が言うか、音響にどの楽器を使用するか等の音響プラン・照明プランを練った。各人、テキストをしっかり読み込んできており、積極的にアイデアを出したり、他のメンバーの考えを理解しようと質問を重ねたりする姿が見られた。14：30からは全員がイベントホールに集合し、ホールスタッフから照明機材の使い方を教えてもらった後、それぞれ作成した照明プランで、大きな白布を舞台セットに使用した場合の照明の当て方などを試す時間を設けた。最後に２日目の振り返りを行った。

「みんなでつくる演劇体験ワークショップ」3日目
2月13日（日）10：00～17：00
参加者：9名

１チームで２名の欠席が出たため、講師が代役でそのチームに入って続行。最初に、全員で本日の流れを確認した後、チームごとに場当たり・ゲネプロを体験。その後、ホールスタッフ等が鑑賞する中、発表した。演出、音響、照明、役者がそれぞれ役割を担って発表した作品は、同じテキストを使っていても、それぞれ全く違う作品となっており、鑑賞後は、互いの作品への率直な感想や質問、ワークショップ全体に対しての感想などの振り返りを行った。参加した中高生からは「裏方も体験できて勉強になった」「最初はコミュニケーションがうまくいかず、チームの雰囲気も良くなかったが、三日目には、誰かが出した案に対して『それいいやん』『こんなのはどう？』など意見を出し合えるようになって良い雰囲気になった。そういう空気はどのような場でも必要なものだと感じた」といった感想が出て、劇場での創作体験を通して演劇について学んだだけでなく、交流を通してコミュニケーションについても学ぶ機会となっていた。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

枚方市総合文化芸術センターは、枚方市の文化芸術の拠点施設として令和３年（2021 年）８月 30 日に市の中心部である京阪本線枚方市駅前に開館した。枚方市では同センターの開館を機に、多彩で魅力的な事業を実施することで、市民が身近に文化芸術に親しむ機会を創出するとともに、文化芸術の振興を支える人材の育成や、都市の魅力向上、賑わいの創出に努めている。特に感受性の豊かな時期に文化芸術に触れる機会の創出に重点を置き、全ての子どもたちが等しく文化芸術を体験できる事業を教育委員会と協力して実施している。

今回のリージョナルシアター事業は、そうした小中学校との連携で実施している文化芸術体験事業を通して文化芸術に関心を持った子どもたちが、次のステップとして、より深い演劇体験ができる機会として実施させていただいたもので、こうした取り組みを通して、文化芸術の裾野を広げることを目的としている。

●企画・実施において苦労した点

企画については、本市出身のごまのはえ氏のご尽力で、「文化芸術の裾野を広げたい」という本市の意向を踏まえ、役者だけでなく照明などの裏方も体験できる初心者向けの内容としたことで、当初、実施予定だった令和２年度は、演劇部員を中心に市内外の中高生から応募があり、定員の 40 人がほぼ埋まる状況となった。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により令和２年度は中止となり、令和３年度に２年越しで実現することができたが、開催前に感染が急拡大し、大阪府にまん延防止等重点措置が適用され、中学・高校でも休校や学年閉鎖・学級閉鎖が相次ぐ中での開催となり、参加者数が伸び悩んだ。実施においては、感染対策を念入りに行い、発表時を含むマスクの常時着用や、楽器や照明器具など共有備品に触れる際の手袋着用など感染対策を徹底しながらも、演劇に必要なコミュニケーションの妨げにならないように配慮することに苦心した。

●プログラムを実施した成果

中高生が感受性の豊かな時期に、本格的なホール空間でプロと一緒に演劇を基礎から学び、発表まで体験できたことや、舞台の裏方体験で、照明機材等の使い方をホールスタッフから直に伝授してもらう中で、ホールスタッフと直に触れ合うことができたことも、将来の人材育成の面で有意義であった。参加者は 11 名であったが、所属する学校の演劇部顧問が複数見学に訪れるなど関係者の関心が高く、中高校生の演劇に関わる人材のネットワークができたことも大きな成果だと考える。

コロナ禍で学校での活動に様々な制約がある中、参加者たちが学校や学年を越えた新たな交流を育むことができたのは良い体験になったと思う。最初は緊張していた参加者たちが、創作活動を通して徐々にコミュニケーションを取れるようになり、互いの連絡先を交換する場面が見られる等、新たなつながりが生まれていた。また、参加者全員が「枚方市総合文化芸術センターを訪れるのは初めて」という状況で、新しいセンターの存在を中高生たちに知ってもらう機会となったのも、成果であったと考える。

●今後の展望

今回、参加者からは「学校では体験できない充実した内容で演劇の基礎を学べ、良い経験ができた」「知らない人たちと創作して新たな気付きがあったし、何より楽しかった」「後輩たちのためにも、またやってほしい」といった感想が聞かれた。枚方市総合文化芸術センターを拠点に「文化芸術の裾野を広げる」ためには、こうした取り組みを一つひとつ積み重ねていくことが重要であり、当面は、ごまのはえ氏のお力添えをいただきながら、こうしたワークショップの開催を継続したい。

継続する中で、中高生の演劇ネットワークを構築し、総合文化芸術センターの他事業との連携の中で、中高生の演劇鑑賞、ワークショップ参加、舞台発表などの機会の創出につなげることで、文化芸術の裾野を広げるとともに、センターを中心としたまちの賑わいづくりにつなげ、センターが人々の交流促進や都市の魅力の向上に寄与する施設としての役割を果たせるよう育てていきたい。

アーティストレポート

枚方の新しい場所

ごまのはえ

枚方は京都と大阪の間にあり、古くは宿場町として栄え、1960年代からは大阪エリア京都エリアに勤める人たちが暮らす住宅地として人口を増やしてきた。私もこの街の生まれだ。両親もその頃に枚方に越してきた。友人の中には、中高生になると、枚方では満足できず、大阪や京都に行き、服や本を買う人が多かった。私も１８歳から京都で暮らし、はじめて小劇場、音楽ライブ、ミニシアターなどに触れた。振り返ると枚方は、子育ての街であり、文化に興味のある若者が遊ぶ街ではなかった。

そんな枚方に2021年枚方市総合文化芸術センターがオープンした。大中小と三つのホールを備え、なかでも一番小さなイベントホールはブラックボックスで、（清潔なことを除けば）小劇場の雰囲気を漂わせている。この施設が機能すれば、枚方の若者たちの生活もずいぶん変わるように思う。

ワークショップ会場はこのイベントホール。対象は枚方を含む北河内地域の中高生だ。応募者の大半は演劇部に在籍している可能性がある。高校演劇はプロセニアム型の劇場でされることが多い。今回の会場はブラックボックス型なので、少し困ったが、やはりブラックボックスでしか出来ない「空間デザイン」を体験することを主眼にメニューを組んだ。テキストは「古事記」の一文。それをチーム分けし、それぞれ演出、照明、音響、役者などの役割を決め、三日間で舞台作品を創りあげる内容だ。

日々感染者が増えるなか当日を迎えた。参加者は定員を大きく下回った。前述の通り高校演劇とは違うアプローチで演劇を体験するメニューだったが、参加者それぞれが楽しみを見つけ、取り組むべき自分の課題を設定し、それに挑んだ三日間だった。チームの様子を観察していると、ほんの些細なことで気持ちが楽になり、自分の気持ちを口に出来る人がとても多い。賑やかにお喋りしていると思っても、実はどの仮面でこの場にいようか、必死に模索しているのかもしれない。もちろん一番楽な仮面で参加してほしいし、気持ちが楽になるほんの些細なことが、出来るだけ沢山おきるようにしなくてはならないと感じた。また参加者数が少なかったことで、一人一人の取り組む様子をしっかりフォロー出来たし、集団創作にありがちな発表前のバタバタもなく、直前まで創作を粘ることができた。これは今後の参考にしたい。そして今回何より助かったのは劇場の機構スタッフの方々の協力だ。受講者に照明プランを考えてもらえるように、様々な準備をしてくださった。また調光卓の使い方までレクチャーしてくださった。参加した中高生にとっても劇場の機構スタッフと親しくなったことは、今後彼彼女らがこの施設で創作する際に、どれだけ心強いことだろう。

今回のワークショップは枚方市総合文化芸術センターをハブにした中高生たちの交流を盛んにすることが、一番の目的だったと理解している。ワークショップ期間中に限って言えば、施設内に年配の方々の姿は多く見かけたが、若者の姿はまばらだった。きっと若者向けの演目が上演される時には、施設内は若者でごった返すのだろうが、そうでない日は、年配の方々が多いのではないだろうか。それが悪いわけでは決してないが、大昔枚方で若者だった身からすれば、ぜひ若者の飢え（思い切って言うと「青春」）をこの施設で受け止めてほしい。機能的には十分可能だ。今回のようなワークショップを定期的に開催することで、センターが中高生の交流の場になってくれることを願っている。

久留米シティプラザ（福岡県久留米市）実施データ

実施団体	久留米市
実施ホール	久留米シティプラザ
担当者	宮崎麻子
実施期間	下 見 派 遣　令和３年 12 月 22 日（水）～ 12 月 23 日（木） １回目派遣　令和４年１月 26 日（水）～ 12 月 29 日（土） ２回目派遣　令和４年２月 21 日（月）～２月 23 日（水・祝）
アーティスト等	アーティスト：多田淳之介　　アシスタント：（1 回目）真崎千佳、金川直美　（2 回目）真崎千佳、YORIKO アドバイザー：岩崎正裕（2 回目視察）

■下見派遣内容

12 月 22 日（水）打合せ、下見（久留米シティプラザ、インガットホール）

12 月 23 日（木）打合せ、下見（そよ風ホール、石橋文化センター）

■１回目派遣内容

1 月 27 日（木）15：00 ～ 17：00　職員向けインリーチ①（インガットホール）

1 月 28 日（金）10：00 ～ 12：30　職員向けインリーチ②（久留米シティプラザ）

14：30 ～ 17：00　職員向けインリーチ③（石橋文化センター）

■２回目派遣内容

2 月 22 日（火）13：00 ～ 15：30　職員向けインリーチ④（久留米シティプラザ）

18：00 ～ 20：00　職員向けインリーチ⑤（そよ風ホール）

2 月 23 日（水・祝）13：00 ～ 15：00　地元演劇関係者等対象ワークショップ

スケジュール

派遣回	下見派遣		1 回目派遣				2 回目派遣		
月日	12 月 22 日	12 月 23 日	1 月 26 日	1 月 27 日	1 月 28 日	1 月 29 日	2 月 21 日	2 月 22 日	2 月 23 日
9：00	移動								
10：00		会場下見・打合せ（そよ風）		打合せ	インリーチ②（シティプラザ）	打合せ			
11：00							移動		
12：00		移動・休憩			休憩・移動				
13：00	打合せ		移動	休憩・移動		移動		インリーチ④（シティプラザ）	演劇関係者 WS
14：00	会場下見・打合せ（インガット）	会場下見・打合せ（石橋）			インリーチ③（石橋）				
15：00				インリーチ①（インガット）			打合せ	休憩・移動	フィードバック
16：00		振り返り							
17：00		移動			打合せ				移動
18：00								インリーチ⑤（そよ風）	
19：00									
20：00									
21：00									

プログラム詳細

職員向けインリーチ①「企画づくり」
1月27日（木）15：00～17：00
会場：インガットホール　研修室
参加者：10名（城島関係職員５名、プラザ職員３名、市文化振興課職員２名）

インガットホール担当者ほか城島地域を担当している職員やプラザ職員等が参加し、城島を舞台にした企画づくりを行った。

自己紹介からスタート。城島を文化的な面でもなんとかしたい、文化は心を豊かにするのでホールの利活用を促進したいという熱意あふれる職員の声があがった。

多田さんから地域における文化施設の役割や、キラリ☆ふじみでの実践例などの話、金川さんの活動紹介の後はグループ活動に移った。

まず「城島の長所・短所」を意見交換。「長所の中で10年後にないもの」「短所の中で10年後悪化しているもの」「10年後のビジョン」をさらに話し合った。多田さんは地域の課題/資源から事業を組み立てること、ビジョンを持つことの重要さを伝えた。

職員向けインリーチ②「企画づくり」
1月28日（金）10：00～12：30
会場：久留米シティプラザ　久留米座
参加者：11名（総務２名、技術４名、広報２名、事業制作２名、市文化振興課職員１名）

プラザで働く総務、技術、広報、事業制作等の職員が参加し、プラザの未来を考える企画づくりを行った。

劇場法などの根拠を示しながら、芸術が生活において、そして文化施設が地域において果たすべき役割を説明。さらにキラリ☆ふじみでの実践例とその成果を映像、写真で共有した。

その後、コミュニケーションを図るワークショップをはさんだ後、小グループに分かれて「久留米の長所・短所」を話し合い、久留米で行う文化芸術事業案を出し合う場面では、自然や食を活かした森の中での音楽フェスティバル、異年齢交流を目的にした教室を開催する等のアイデアが出されていた。企画を担当する職員に限らず、どの職員もあふれるアイデアがあることを確認、共有して終了。

職員向けインリーチ③「企画づくり」
1月28日（金）14：30～17：00
会場：石橋文化センター　小ホール
参加者：9名（石橋文化センター職員4名、プラザ職員5名）

石橋文化センターで事業企画を担当する職員を主対象にした企画づくりを行った。双方の職員交流も意識した。

地域の文化拠点としての公立文化施設について、キラリ☆ふじみの実践例の話や金川さんの活動事例を共有した後、いくつかシアターゲームを実施。その後、小グループに分かれて、「久留米の長所、短所」を出し合った後、「石橋とプラザとの協働企画」のブレストを行った。あるグループは、久留米の新しいお正月をつくるとして、プラザ、石橋、その間をつなぐ商店街を市民に開放し、ダンスや演奏が市内にあふれるイベントを提案。館の連携は今回のような職員同士のブレストがきっかけになると楽しいかもしれないという気持ちがそれぞれの職員に芽生え始めたところで終了。

職員向けインリーチ④「企画づくり」
2月22日（火）13：00～15：30
会場：久留米シティプラザ　久留米座
参加者：11名（総務2名、広報2名、技術4名、事業制作2名、他劇場職員1名）

プラザで働く総務、技術、広報、事業制作等の職員が参加し、プラザの未来を考える企画づくりを行った。

自己紹介では、久留米への愛情、プラザの課題意識や展望が垣間見える瞬間が多かった。

多田さんによる座学のあと、YORIKOさんによる「おやこ学校」の活動事例は、親や子どもが同級生になって、地域で働く人を先生に学びあうもので、地域活性化の要素などが盛り込まれた企画だった。

その後、小グループに分かれて久留米の長所・短所を出し合い、課題を克服するようなイベント案を話し合った。商店街とプラザの結びつきを視野に入れ、商店街の活気を取り戻す案や、まちの人に聞き取りをして商店街を地図でよみがえらせる案など、地域に根ざしたアイデアが目立った。

職員向けインリーチ⑤「企画づくり」
2 月 22 日（火）18：00 ～ 20：00
会場：久留米シティプラザ　久留米座
参加者：4 名（そよ風ホール職員 1 名、プラザ職員 3 名）

そよ風ホールで実現できる具体的な企画を考える企画づくりを行った。多田さんが、これまでキラリ☆ふじみや、全国の公共劇場で行った市民との取り組み事例を紹介。とくに市民参加劇の映像では、演劇のプロではない人々が舞台で生き生きと演じている様子や、職員の演劇に対する固定概念を超えるような演出に魅了されていた。田主丸は観光に力を入れており、地域外の人の誘致には注力しているが、地域住民がホールで文化的なものに触れる機会の拡充を目指したいところである。担当者から、近くの川で楽器の練習をしているプロの演奏者の話があがると、山と川を背景に演奏を聴く機会はなかなか体験できないのではという多田さんの発言を受け、著名人を招聘するだけでなく、地域資源は工夫次第で事業化できるという新しい視点を得て終了。

地元演劇関係者等ワークショップ
2 月 23 日（水）13：00 ～ 15：00
会場：久留米シティプラザ　久留米座
参加者：9 名 (劇団アルムナイ 4 名、劇場インターン 2 名、プラザ職員 1 名、地域の活動者 2 名)

ワークショップの担い手づくりの入門編として実施。多田さんは、ワークを 1 つ終える毎に、その意義や意図を説明しながら進めた。たとえば、冒頭に行った名前のキャッチボールでは、最初に名前を呼び合うワークを行うと共同作業がより円滑になること、「しゃべらずに背の順」では、人の位置をみて自分の位置を決める作業で、まわりをよくみるということを体感できると説明。グループワークでは、「久留米市といえば」というお題から想起した松田聖子やラーメンをグループ全員の身体で表現、さらにその 50 年後の状態を相談しあって表現した。ここで重要なことは、表現したものをみた人から意見や感想をもらうことにあり、みる人によっては想定外のものとして受け止められる可能性があるということを共有した。

最後は「しりとりを再現する」ワークを行った。1 分間のしりとりを思い出して書きとめ、再現するもの。言葉の 1 つ 1 つよりもニュアンスを変えないということがポイントである。さらに他の人がやったことを再現した。このワークでは日頃の自分のコミュニケーションに意識的になること、振り返るきっかけになること、自分と他人は違うと知ることなど、多様な要素を併せ持つもので、多田さんの演劇観に立脚したものだった。ワークショップで地域の人々とコミュニケーションをとることや、参加者同士が交流しあうことは、自身の演劇創作にも地続きであり、影響しあっているという多田さんの言葉に、参加者から自分もワークショップをやってみたいという感想を得て、終了。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

開館３年目に応募したリージョナルシアターであるが、コロナ禍を受けて開催延期となり、今回ようやくの開催となった。参加目的は、職員のスキルアップと、市内に４つある文化施設間の関係性の向上およびネットワーク作りである。開催が延期したことで、各施設、プラザ自身も担当者の入れ替わりを経験したが、意識の差異は多少あったものの、関わった職員はおおよそ当初の目的を意識していたと思う。

●企画・実施において苦労した点

とくに４つの文化施設の連携については、当初は文字通りに４つ施設すべての連携を意味していたように思っていた。そのため、４館が一致団結する状態とはどういうことか、それがどんな利益を地域にもたらすのか、想像することが難しかった。しかし、各施設の担当者と個別に話し合いを重ねた結果、「プラザと各施設との連携」というイメージが各施設ともぼんやり共有できていき、途中でその方向に舵を切ることとなった。また、リージョナルシアター事業を担当するにあたっては、アーティストが複数回往来する意義を踏まえ、その先を意識する必要があると感じていた。下見や実施において、各施設と連携のイメージを共有できたことにより、「プラザ - 各施設」を想定した次年度事業案を検討する足がかりになったと思う。

●プログラムを実施した成果

各施設の担当者や参加した職員が、いかに地域に根ざした文化施設を目指しているのか、熱意や課題意識をもって日頃の業務に当たっているか、知ることができた。職員のスキルアップが参加目的に挙がっていたが、すでにスタートラインには立っていたと思った。すべてに参加したのは限られた職員であるので、挙がっていた声を他の職員に共有したいと思う。また、今回を機会に、久留米市近郊出身、在住する演劇等の活動者たちと交流を持つきっかけを得たことは大きい。劇場が地域の活動者とともに成長していけたらいいと思う。４つの文化施設の連携については、プラザと各施設が連携するイメージを共有できたことは意義があると思う。

●今後の展望

プラザでは、市民により開かれた劇場を目指している。そのために、市民が気軽にアートやアーティストと交流できる、持続可能なしくみを構築したいと考えている。４つの施設が共通していたのは、子どもを対象にした事業の拡充である。来年度は、多田さんを進行役に、地域の活動者の協力を得ながら、子どもを対象にした事業を展開する予定である。プラザ内においては、年間４回実施することで子ども事業の周知、定着化を図りたい。他施設でも同じプログラムを当事業の出張という枠組みで実施する予定である。実施しながら、役割分担配分など、お互いに無理のない、よりよい連携のしくみを考えていく一助にしたい。

アーティストレポート

未来に向けての劇場の役割を考える

多田淳之介

福岡県久留米市は 2020 年度に実施の予定でしたが、新型コロナの感染拡大により延期となり 2 年越しでの実施となりました。応募の段階から担当者も 2 回代わり、担当者 2 名とも実施年度の着任という基本的にはゼロベースから実施内容を組み立てることになりました。今回の事業の大きな柱は二つ、まずは応募当初からあった旧町の劇場との連携という課題、それについてはまずは各館の実態を把握するところから着手することになりました。そして二つ目は、開館 5 年を迎えた久留米シティプラザ、劇場の自主事業がほぼ買取り公演のみになっている現状を鑑みて、今後は劇場の自主事業としてクリエーションやアウトリーチ、つまりは創造発信事業、教育普及事業という公立劇場の機能を備えるための第一歩として職員への合同インリーチを行うことになりました。

各地域の劇場への下見を経て、各劇場でも職員向けインリーチを行いました。内容としては地域課題に対してどう劇場のプログラムが向き合えるかの事例紹介とディスカッションでしたが、各劇場のインリーチに久留米シティプラザの職員が参加していたことは今後の連携に向けてかなり良かったのではないかと思います。

結果、劇場間連携については、今後久留米シティプラザで開発した地域プログラムを各劇場の状況に合わせてアレンジしながら実施を目指すという方向が見えてきました。予算や人員不足が課題である各館の現状を踏まえると実現の可能性も高いと思います。

久留米シティプラザでのインリーチについては、行政職員、事業や広報、舞台技術など仕事で顔は合わせるけど仕事以外の交流が無かった各セクション合同で行えたことは大きな前進だったと思います。舞台技術の若い職員が、久留米が地元で商店街が寂れてしまうのが悲しい、劇場のプログラムでなんとかしたいという思いを話してくれたり、お互いどんな思いで同じ職場にいるのかという、人と人の本来のコミュニケーションが開館以来初めて行われたということは大きな一歩でした。そこに当然のごとく管理職も居合わせるよう計画した担当者の手腕も素晴らしかったと思います。

日本の公共ホールは「文化芸術基本法」や「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」によって定められた役割があるにも関わらず、劇場を設置する自治体や運営受託者の文化芸術へのリテラシーの高低により運営されているのが現状です。これが病院や学校だったとしたら、と思うと怖い、とも実は言っていられず、劇場がそんな状況だから現在のコミュニティの崩壊や他者への想像力の不足、身体感覚の欠如が起きているとも言えます。劇場だけの話ではなく、地域づくりに文化芸術を取り入れていないところは今後さらに後退していくでしょう。現状日本全国が後退していますが、少なくとも苦しみながら後退するか、楽しみながら後退するかの違いはあるでしょう。久留米も経済の物差しで測ればすぐそこに博多があり当たり前に若者は出ていく。逆に言えば博多の近くでこんなに豊かな自然と歴史と文化がある地域です。勝ち目のない物差しで測って貧しい地域だと思われるのは勿体無いですよね。博多や東京のようなことを無理してやるのか、久留米にしか無いものを大事にして久留米にしかできないことを目指すのか、芸術の役割は新しい価値観を生み出すことでもあります。シティプラザから久留米が変わっていく未来を楽しみにしています。

荒尾総合文化センター（熊本県荒尾市）実施データ

実施団体	中央設備　ステージ・ラボ共同体
実施ホール	荒尾総合文化センター
担当者	村上史子
実施期間	下見派遣　令和３年10月16日（土）～10月17日（日） １回目派遣　令和３年11月19日（金）～11月22日（月） ２回目派遣　令和３年12月10日（金）～12月13日（月）
アーティスト等	アーティスト：ごまのはえ　　アシスタント：（1回目・2回目）高原綾子・池川タカキヨ

■下見内容

10月16日（土）打合せ、会館側が準備した写真を検討・写真の場所を視察①

10月17日（日）ステージ☆キッズの子どもたちとの顔合わせ（音づくりを体験）、写真の場所を視察②、写真の再考、打合せ

■１回目内容

11月20日（土）10：00～11：30　脚本ワークショップ講座編A班

13：30～15：30　表現ワークショップ基礎編

11月21日（日）10：00～11：30　脚本ワークショップ講座編B班

13：30～15：30　脚本ワークショップお出かけ編

■２回目派遣内容

12月11日（土）10：00～12：00、14：00～16：00　創作

12月12日（日）13：00～16：00　ボイスドラマ公開録音

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣				2回目派遣			
月日	10月16日	10月17日	11月19日	11月20日	11月21日	11月22日	12月10日	12月11日	12月12日	12月13日
9：00	移動			準備	準備	打合せ		準備		
10：00		ステージキッズ顔合わせ		脚本WS基礎編A班	脚本WS基礎編B班			創作	準備	フィードバック
11：00			移動			移動	移動			移動
12：00		写真の場所視察								
13：00	打合せ 会場下見			表現WS基礎編	脚本WS お出かけ編				創作	
14：00	写真選び 写真の場所視察							チラ見せ会	公開録音	
15：00			打合せ 写真の確認				打合せ・準備	創作		
16：00		打合せ	会場下見	振り返り 準備	振り返り			振り返り 準備	振り返り	
17：00		移動	地域資源調査 （図書館）							
18：00										
19：00										
20：00										
21：00										

プログラム詳細

脚本ワークショップ講座編 A 班
11 月 20 日（土）10：00 ～ 11：30
会場：会議室 1
参加者：5 名

講師ごまのはえさん、アシスタントの高原さん・池川さんの自己紹介後、2 枚の写真を使って参加者の自己紹介。

２枚の写真は、どちらが先に撮ったものか後に撮ったものか考え、簡単な物語を作る。（みなさん、それぞれに興味深いお話を発表された。一気に場が和んだようであった）

その後、雪の中で鳥居にしめ縄を掛けている二人の写真を見て書かれた作品を題材にして、脚本とはという講座が始まる。（自己紹介の導入から、核心の脚本の話で、皆さん、なんとなく脚本とは、をつかまれたのではないか）

次に、準備している写真から選ぶ。（皆さん 1 枚～ 2 枚の写真を選んだ）

脚本の枚数・形式・提出期限（12/5）など確認して解散。

表現ワークショップ基礎編
11 月 20 日（土）13：30 ～ 15：30
会場：小ホール
参加者：20 名

講師ごまのはえさん、アシスタントの高原さん・池川さんの自己紹介後、参加者は３台の机に並んだたくさんの楽器を、すべて手に取って鳴らしてみる。講師陣から使い方の説明を受ける。（参加者は興味津々、飽くことなくすべての楽器に集中していた。初めて会った２０名〈小学３年生から７５歳まで〉は、徐々に打ち解けていった。）

その後５班にわかれ、課題の音を作った。何度も楽器を変えて、課題の音により近い音を熱心に探した。（例、花火・雷・雨風・踏切を通過する電車など）課題の音あて大会をした。（一つの班が発表し、他の 4 班が何の音か当てる。なんとなくリーダーが決まっていった。大人の方が子どもたちを優先する場面もあった）最後に、心の様（失恋など）の音も、楽器で表現した。（皆さん、とても楽しそうであった）

脚本ワークショップ講座編 B 班
11 月 21 日（日）10：00 ～ 11：30
会場：会議室 1
参加者：8 名

A 班同様に進行。講師ごまのはえさん、アシスタントの高原さん・池川さんの自己紹介後、2 枚の写真を使って参加者の自己紹介。2 枚の写真は、どちらが先に撮ったものか後に撮ったものか考え、簡単な物語を作る。（今回の参加者は、呼びかけてきてもらった人がほとんどで、脚本など自分に書けるのだろうかという緊張感を感じたが、少しずつその気配も薄らいでいった。）

A 班同様「しめ縄」を題材に、講師より脚本についてのお話があり、準備した写真を見て写真を決めた。（昔話に盛り上がっていた。）

脚本の枚数・形式・提出期限（12/5）など確認して解散。（書けないかもしれないという人が何人か見受けられた）

脚本ワークショップお出かけ編
11 月 21 日（日）13：30 ～ 15：30
会場：宮内炭鉱電車停車場跡・三川坑跡
参加者：7 名

写真の場所に行く。（3 台の車に分乗して出かける。全員、保険に加入。）

宮内炭鉱電車停車場跡に行った。この場所で昭和４０年頃、電車に乗り込む写真を選んだ人もおり、興味深く観察。

次に、ごまのはえ作「元気でな！」の上演。この作品は昭和４０年代の宮内炭鉱電車停車場が舞台の作品。実際のプラットホームを使って、高原さんと池川さんが演じた。（現場での上演は初めてだったので、とても新鮮だった）

小雨が降ってきたが、ここを走っていた炭鉱電車が展示してある三川坑へ行く。大きな電車が 4 台並んでいた。

雨が降り出したので、帰路に就いた。このお出かけ編は、写真とは別に１編書くことになった。（この回に参加した人は、より鮮明に、脚本について学んだと思う）

表現ワークショップボイスドラマの創作
12 月 11 日（土）10：00 ～ 12：00
会場：練習室 1、練習室 3、小ホール
参加者：16 名

講師のごまのはえさんより、脚本ワークショップに参加した人の作品が１９編集まったこと、ここではその中の６編をボイスドラマにすることなどの説明があり、３班に分かれて練習すること、３班のメンバーの名前が発表された。

各班２編の発表となった。

各部屋に分かれて創作。

読み合わせ、配役決め、楽器の選択。

（小学３年から７５歳までのメンバーがいる中での練習は大変だったであろうと思う。それでも、講師陣は、丁寧に取り組まれていた。）

表現ワークショップボイスドラマの創作
12 月 11 日（土）14：00 ～ 16：00
会場：練習室 1、練習室 3、小ホール
参加者：17 名

全員小ホールに集まって「チラ見せ会」があった。

まだ完成ではないが（ほとんどできていない作品もあった）発表することで、他のグループの状況を見て、自分たちがしなければならないことを理解するために、良い企画であった。

その後、それぞれの部屋に分かれて創作のつづき。

（講師陣は、参加者一人一人に向き合い、仕上げていったが、時間は限られていて、焦る気持ちもあったのではないかと思う。）

ここから、ボイスドラマで発表する作品「月の色」の作者も飛び入り参加。

ボイスドラマ公開録音
12 月 12 日（日）13：00 ～ 16：00
会場：会議室 1、練習室 3、小ホール
参加者：24 名

急遽、録音開始が 14：00 ～となり、13：00 ～ 14：00 までの 1 時間が各グループに分かれての練習となった。（この 1 時間は、みんなにとって、大変貴重な時間だった。）

14：00 ～の録音は、どの作品も 1 回録りでスムーズに進んだ。（どの作品も驚くほどの完成度であった。）

本日録音する６作品の作者も聴きに来られた。保護者３名も来場。録音終了後、全員で感想を発表した。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

これまで８年間、「創作ステージ」で荒尾の物語を、市民の皆さんと共に創ってきた。
荒尾には、永く荒尾を支えてきた炭鉱がある。また、ジャンボ梨の歴史も古い。豊饒な有明海（荒尾干潟）は人々の食を満たしてきた。連綿と受け継がれていく小代焼。また、私財をなげうって民のために生涯を捧げた宮崎兄弟、感性あふれる多くの詩を残して夭折した海達公子など文化人も多い。そしてそれらは、どこかで必ず繋がっている。これらを題材に創作ステージで８作品を上演してきた。平成 28 年度で創作ステージを終了したが、これら荒尾の歴史は何度も発信していかなければならないと思う。現在は、ステージ☆キッズの子どもたちと、なるべく荒尾の物語を発信しようとしている。しかしなかなか構想が湧いてこない。今回の事業が、何がどうなのか理解しないまま、何らかの形できっかけになればと思い参加した。

●企画・実施において苦労した点

地域創造のリージョナルシアター事業の募集チラシを見て、直感的に応募したので、実際にどのような事業なのか、理解していなかった。リモートでの話し合いでその事を実感した。

事前に行なわれた研修会がオンライン開催だったこともあるかもしれないが、思いを伝える事も、力不足でなかなか理解してもらえなかったように感じた。話しているうちに、なんとなくこちらの思い（計画）は、難しいかもしれないと思い始め、まずは講師からのアドバイスのあった内容で実施した方が、結果的に良いように思えてきた。（４日間で出来ることは限られている）それからは、スムーズに話が進んだ。

写真は荒尾の風景の写真を集め準備していたが下見派遣で、写真には人物が写っていた方が良いことが分かった。あらためて写真を集めた。メールでのやりとりは講師の方も大変であったと思う。

また、表現ワークショップ・脚本ワークショップ共に応募者が集まらなかった。当てにしていた近隣高校の演劇部が、新型コロナウイルス感染症の影響で活動休止していた。表現ワークの時間変更をしたり、市内の高等学校を訪ねて、参加者募集の依頼をしたりした。

●プログラムを実施した成果

「脚本ワークショップ」自己紹介の２枚の写真を使って、簡単なお話をする手法にはなるほどと感動した。参加者もなんとなく、物語の作り方が解ったのではないかと思う。講師の脚本のお話、お出かけワークでの演劇上演などで参加者の構想が鮮明になったのではないかと思う。写真選びは、昔の写真を見て皆さん昔話に花が咲いていた。締め切りまでに 19 編の作品が集まった。講師によると粒ぞろいであるとのこと。

「表現ワークショップ」では、たくさんの楽器（主に民族楽器）があり、初めて見るものも多く、みんな興味津々であった。この楽器を使って音を作るグループ（老若男女）は、だんだん打ち解けて、見ている方も和んだ。コミュニケーション作りに成功していると感じた。ボイスドラマの創作でも、良い関係ができていた。

●今後の展望

19 編の作品は一冊にまとめ、文化センターでの貸し出しや、市立図書館に置いてもらう事、また、ホームページに掲載することを考えている。６作品のボイスドラマは、編集中だが、完成後の見通しはまだ立っていない。ホームページに上げることは、すぐにも出来そうだが、YouTube での配信は考慮中である。

ステージ☆キッズでは、６作品を読んで『月の色』という作品を 12 人中 11 人が推した。

中学生が、自分が脚本を書きたいと手を挙げた、ジェンダーがテーマだそうだ。現在制作中である。この作品を生かした物語が出来上がるのか、少々心配でもあるがまずは任せてみようと思う。作者とも連絡が取れて、作品使用を快諾してもらった。今後練習にも顔を出してもらえるようで、書いている中学生にとっても原作者のアドバイスは貴重だと思う。背景にある炭鉱の話が盛り込めればベストだ。

アーティストレポート

子供たちの居場所を守る

ごまのはえ

今回の派遣事業を通じて感じたことは、荒尾総合文化センターが主催する「ステージ☆キッズ」が、とても大事な事業であることだ。ステージ☆キッズの正式名称は「こども劇団ステージ☆キッズ」と言う。荒尾総合文化センターを拠点に活動している小中学生の劇団だ。月に数回、ホールに集まってお稽古をする。メンバーにはかなり遠くから通って来る子もいる。その子達が今回の派遣事業にも多数参加してくれた。そこでの彼彼女らの様子を見て、学校とは別に集う場所があることの大切さを痛感させられた。これこそ劇場の仕事だと思った。派遣事業を終えた今は、ステージ☆キッズの存在をもっと多くの家族に知ってもらいたい。またステージ☆キッズの子供たちに様々な体験をさせてあげたい、そんな気持ちでいっぱいだ。漏れ聞こえる話によると荒尾総合文化センターは自主事業を行うには厳しい状況にあるようだ。現在のステージ☆キッズの運営も職員さんの気持ちに依るところが大きいようにお見受けした。今も職員の皆さんは出来る範囲最大のことをコツコツと積み上げておられる印象だが、失礼ながら、見通しは明るくないのではないだろうか。今回の派遣事業をきっかけに、この風向きを変えねばならない。派遣最終日の振り返りでは、今後について様々な意見が出た。幾つか紹介する。

①今回の派遣事業で出来上がった脚本から縁を広げてゆく。市の観光部署と協力して、ステージ☆キッズのメンバーで、宮内停車場及び炭鉱電車を舞台にした作品のリーディングを現地で行ってはどうだろう。もちろん子供達の負担にならない範囲で。
②今回の派遣事業で知り合った人の縁を深めてゆく。映像作成やネット告知に強いＩさんや、大牟田で読み聞かせの活動をしている皆さんなど、活動的な人たちに出会うことができた。この方々に、例えば①のような企画に参加してもらうのはどうだろう。
③地元九州の表現者との共同作業。
④隣接する公共ホールと共同して事業を企画する。

以上のことをホールの現状と折り合いをつけながら、選択・実施してもらえたら、ステージ☆キッズという子供たちの居場所を守ることが出来るのではないだろうか。

これほど「これから先」が気になるのは今回が初めてだ。それは荒尾の現状に、日本全体の将来を感じたからだろう。世間では「子ども食堂」の必要がますます高まっている。ステージ☆キッズは、食事こそ出さないが「子ども食堂」と似たような役割を果たしているように思える。様々な大人が、それぞれの立場で尽力すべき事柄だと感じた。

令和２年度・３年度リージョナルシアター事業報告書
発行・編集：一般財団法人地域創造
発行日：令和４年３月